Wason
May・1895
no. 410

明治十八年初刊

女學雜誌

毎月廿五日發兌

第四百拾號

要目

傳道界の風雲及個人の勢力
大ナポレヲンとペスタロチ
尚武と婦女子
凱旋に對する家庭の歡迎
透谷は生たり
詩人の自殺
靈界公園の地
墓まゐり
殘影　殘夢
行く秋のおもひ　哀蝶
曉夢　花里
出船　花影
花下の旅客　白衣
轉禍成福
こゝろの影
ことしの地久節
軍人慰藉會
神代の女性の爭論
鐵舟居士の二令孃
福澤先生の古物展覧
西京に於る監督ウイリアム

明治二十八年五月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百拾號目次

社説

轉禍成福

評論

傳道界の風雲及個人の勢力◉ナポレヲン一世とペスタロヂー(戰爭と教育)鷗村

詩二首(八木文卿)

女學

凱旋に對する家庭の歡迎◉尙武と婦女子◉軍人慰藉會◉男女別學の得失

隨感

透谷は生たり◉こゝろの影◉光明何處より來る◉達人の論理◉詩人の自殺◉親ごゝろ◉墓まゐり◉顯界公園の地

爛煥

殘影(賀古殘夢)◎行く秋のおもひ(哀蝶)◎孤兒の有樣(石田孫太郎)◎暗夢(花里)◎浦のしほ貝(冬、花下の旅客、なさけ、牡丹花、口ずさみ、無常)白衣◎出船(花影子)

片々

ことしの地久節◉帝國教育大會◉同志女子教育會◉今後の警戒◉神代の女性の爭論◉幼兒教育の調査◉婦人勞働論◉朝鮮婦人の日本留學◉戰勝地の女風◉橫濱の闇夜◉日本婦人服◉督國の婦人◉米國女子高等教育の進歩◉山口縣八代村◉峽中の女子教育◉福澤先生の古物展覽◉鐵舟居士の二令孃◉西京に於ける老監督ウイリアム◉女子講義會◉東京女學生◉馬關毎日新聞の言ふ◉大坂人の結婚年齡◉海軍々人婦人會◉異例別婚者◉女學子の新領地開發意見◉男女身躰比較◉櫻井ちか女史◉天足會◉シャーランド夫人逝けり◉墺公使伯爵◉成美婦人會◉婦人大祈禱會◉所云る家事と云ふ科目につきて◉嚴本善治氏と朝鮮の儒教◉女教師の得失◉國力と女子教育との關係◉文學者の閨門

前號目次

社説

新領地と婦女子

評論

明治十年の西鄕南洲◉南北論◉きやうと◉岡山孤兒院を讀む◉海外傳道論

隨感

月下櫻樹のかげ◉日蓮上人◉法界の𦨞室◉乙女と農夫◉遠見の氣樂さ◉樹紋は面皺の如し◉自から愛敬の情あり◉識らず相侵す

爛煥

歌仙賴政(櫻井鷗村)◉乙女ごゝろ(花里)◉愛の鏡(花影子)◉磯のうは風(櫻精)◉發句四十三首。春の山寺。閨のうれひ。春の夜のいのり。深山の小川◉をさな子(泡鳴子)◉さびしさの美と厭世(無識庵主人)。

女學

近松門左が女性(一、帝國文學)◉朝鮮國の家庭

片々

皇后陛下行啓紀事の文

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずとて院長は太たく心を痛めらるる由に聞けり。加之自今孤女の最長年者は既に十四歳に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんとを祈る。之が爲めに定むる所の憲法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名げて孤女學院特別資本と云ふ。

二　此資本は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業(最初は養蠶)に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四　收益の二分五厘を以て孤女の賃銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

嚴本善治　石井ちか
小鹿島筆　加藤さし
田村武治　津田むめ
名出保太郎　小島きよ
古在さよ　青木まさ
平野はま　杉浦義道

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第四百拾號
明治二十八年五月二十五日發兌

社説

轉禍成福

黒雲の後ろに太陽あり、安くんぞ只だ赫々たる光輝が其裏面に照らすあるのみならん　現に黯々たる其の黒色衣の邊際より漏れて、光明の彼蒼より恵射するを視よ。

天の大任を下すや、先づ其人を艱ます。大任を大國民の上に下さんとする亦た斯の如くならずや。艱難に憂倒して、破して之より靈脱すると能はざるものは、人の凡骨なり。國家も亦た然り。

うき事の尚ほ此上に積れかし、と。断乎、悠然たる此の心、即はち以て百難を排して猛進すべし、乃はち以て明天授くる所ろの大任に當るに足るべし。落然として氣はゝみ、力喪ふもの、如き、到底、論ずるに堪えず。

一と度び退却して消極の地歩を取らば、魔神は乍ち號令し、小鬼は乍ち附け上り、憂患憂患を生み、閉塞、閉塞を來し、持てるもの總べて奪はれて、悉く奪はれ、遂に土足々下に踏にぢらるゝの外ある可らず。人生死活の秘訣「進」の一字にあり。断じて、進まば、鬼神は皆な道を避くべし。人は、如何なる時にも、卑怯なる態度を取るべからず。

人事千百の變、何れか、陰陽光暗の二面を存せざるものあらん。勇あるものは、其光面を見るなり。氣力あるものは、其の陽氣を感ずる也。信あると信なきと、爲す有ると爲す無きと、自主たると奴隷たると、生くると死すると、單に、決意の如何にあり。膽を張り、氣を滿たさば、何ものか能く久しく人を害するとをせん。病毒も尚ほ吸ふべし。岩石も尚ほ嚼み碎くべきにあらずや。

我に一物固く存す、之を「我」と言ふ。この「我」を亡ぼすとを得るものは、果して何ぞ。大山、崩るとも、之を壓するを得る乎。洋水、浸すとも、之を流すとを得る乎。劍戟、能く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

切るヿを得る乎。猛火、能く燒くヿを得る乎。見よ、視よ、天上天下、果して何ものありてか能く我の「我」を滅するヿを爲すぞ。

我等合して同胞となり、國家を組織して一家となる。國家に生命あり、同氣あり、凝結して大ひなる一の「我」となる。國家の「我」は、我等の「我」なり。宇內列邦、それ何ものありてか、能く我等を傷つくるヿを得るぞ。

勝敗は、兵家の常なり。屈伸は、我の自由なり。與ふるも、取るも、惠むも、奪ふも、總べて我が心なり。時に隨ひて斷じ、機に應じて行ふ、抑そも何にかあらん。馬より落ちざる可らざる時は、潔よく落つべし、戰に敗れざる可らざる時は、在のまゝに敗れなん。何んぞ必らずしも、永久、長遠の恥を恥づるが如き卑劣を以て之に處せんや。要は、只だ、自主にあり。自から擇んで、自から行ふ、斷々乎として最上の途を步まば則ち可なり。天地神明に恥ぢず、何ものにか恥ぢん。永遠、不朽に屈するヿなし、何ものにか屈せん。人は、決して「さもしき」「きたなき」卑劣根性を起す可らず。

有爲、大有爲、あらゆる機會に、自から主たるは、進んで取るの氣慨にあり。劍、短からば、一步を進み、矢石、雨ふらば、之にぬれ、敵患、來らば往いて迎ふ。進まずんば、退ぞく也、攻めざれば、敗らるる也。取らざれば、奪はるる也。自主の人、何んぞ、他より制せらるるヿをせん。

故に、傑人は、禍を轉じて福となすヿを知る。此の覺悟あり、此の精神ありて、輙はち、如何なる時機をも善用し、常に能く之を役使するヿを得。此の力あらば、何をか恐るるヿをせん、此の抱負あらば、何れの時ぞ望を失はん。悲しき音を發して、万事休すなど叫ぶものは、凡庸の輩のみ。

左れば、凡そ失敗するものは、才の短なるに由るヿ明らかなりと雖ども、此の失敗を見て、大事既に去れりなど罵しるものは、著しく其の劣れるヿを示す。如何なる時にも究せず、如何なる時をも利用し、他の失敗の爲に途方に暮れて、手を措いて傍觀するが如き迂愚を爲す莫れ。

古しへの人傑、嘗て自から戒しめて曰く、油斷大敵、大膽不敵と。轉禍の秘密に得ざるものは、未だ大事に當るに足らず。個人、すでに然り。國家、亦た然り。如何なる時と、何等の事業も、亦又皆な然り。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

傳道界の風雲、及び個人の勢力

◎因果の法、苟然ならず。世界は、道理なき僥倖を容るゝとあらざる也。勢力をして、其の當然なる結果を收めしめ、敢て越分の効益を私しせしめざるは、是れ嚴然たる天地の大法なり。

故に、某の運動に、某の結果あり、某の事業に、某の影響ありと云ふもの、彼等が互ひに關係する所ろ、當に初めより明断單白なるべし。何んぞ常に超算、存外の出來事ありとすべけん。

然りと雖ども、叫ぶもの高きに據るときは、聲遠きに達し、低きに沒する時は、響き極めて狹まし。洪流に乘ずれば、片葉も百里に航し、大船も、逆風に向ふときは、一里を行くと能はず。如此きは、其の發する所の力の多少に由るにあらず、乘ずる所ろの合勢の便不便に由る也。故に、勢に乘ずれば、此の勢、其力を元動力に加合し、勢に逆らへば、此の勢、元動力の力を奪ふ。亦これ因果の大法に順がふ所以、必らずしも之を沒するにあらずとするも、外形の呈する所ろ、趣きに異色あり。即はち是れ、世間人が非常に特別の結果ありと言ふ所ろのものにして、人世事業の大成功、此時に了す。勢の機なるもの、是れ也。

◎彼の傳道の事や、甚はだ神聖なり。上帝、其道を世界に施かんとして、之に人を役す。此の役者が、上帝の加護により、優裕たる聖示を蒙むるとあらんは、素より疑ふ可きにあらずと云へども、而も、之に過分、不合理の攝助あるべからざるとも亦た明白なりとす。人既に道を傳ふるときは、傳道は一の事業なり。故に傳道も亦た事業に關する盛衰興廢の監理を受くべし。力あるものは、力ある結果を獲、力なきものは、力なき收穫を與へらる、これ正當なる天の則也。

故に、傳道の事業も亦た、勢機合損の支配を受くべし。勢に乘ずるときは、勢の力を合はせられて非常の好果を得、勢に逆らふときは、勢の力に減ぜられて不運の損失を受けん。勇

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

猛なる使徒は曰く、「時を得るも得ざるも道を傳ふ」と。傳道者の熱意は宜しく斯くあるべしと雖ども、之に得不得の「時」あるとは、即はち明らかなり。

若し、夫れ、巨風の吹き來るが如く、洪川の押し流すが如き大勢機の乘ずべきあつて、而して之に伴隨して道を傳ふるとありとせば、豈に其の材料の、塵芥たり、木葉たるを問わんや。たとひ輕軟浮薄にして、常時獨行の力なきものと言ふと雖ども、尙よく飛揚して千里に走り、廣く散布して、八合に到達すべし。大勢の合力に乘じたる傳道者の事業は、正さに眞とに如斯し。

◎近世、基督敎の宣傳せらるるや、時恰かも西洋文明の輸入に際會せり。外國、舶來、西洋人、洋行等の言語に、不可思議の魔力ありし如く、凡そ、善きもの、正しきもの、美くしき者、力あるものは、皆な西洋に在りと想われたり。蓋し、何人にも理想ある如く、國家にも亦た理想あり。而して、理想を措くの所在地は、時と同もに變ず。左れど、維新以後二十年の日本國家の理想は、概して西洋にありき。何んぞ必らずしも實在の西洋にありしと言わん、たゞ所謂る西洋なる名目の所ろにありしと言わん也。

此に於てか、西洋より來れるてふ基督敎は、一大勢力に伴隨せり。敎理の精粗、宗道の高卑は、暫らく言わず。たゞ其の來るや、一大風雲に乘じて來り、其前後に何ものとも知れぬ一大權勢のあるあつて、解す可らず言ふ可らざる威力之に凝もりたり。即はち、これ宗敎的敬意を惹起し、宗敎的權威を發射するの秘密にして、觸るれば恐ろしく、仰げば忝けなく、拜すれば淚こぼれ、信ずれば乍まち一大勢力を感吸する、宗敎的感化力なるもの玆にみち〳〵たり。

夫れ、此の大風に乘じて、此の洪流を下る。木葉も、塵芥も、登龍躍虎の如けん。此時に當りては、如何なる傳道者も、皆な不思議の感化力を發射すべし。乙女も、老人も、小兒も皆な預言すべし。況んや、按手の禮を受け、聖別の位に立ち、一種尊貴の地步を得たる傳道者その人に於てをや。たとひ、談ずる所ろの過半は六かしく、議論は大方分りにくく、人品必らずしも氣高きにあらず、品行必らずしも殊勝にあらずとするも、彼等は既に一大風雲に乘じて、前後に不可思議の魔香を薰じつつあり。凡俗、安ぐんぞ渴仰敬拜せざるを得

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

んや。此時に於ける傳道事業の成功なるものは、すさまじき形勢にてありき。

◎夫れ、勢機の助力によりて非常の成功を遂げたることを知るものは、亦た、其の逆背によりて、非常の損失を蒙むることを覺るべし。

左れど、明治二十年以後、所謂る保守的反動の生起せし此の方、日本社會の大勢は、基督教傳道の爲めに、全たく逆背せしと思ふ莫れ。

蓋し保守的反動は、消極的の運動なり。曰く、國粹保存と。「保存」の二字、既に其の究するを見るべし。消極的反動の熾んなりし所以のものは、原動の勢力を認識したれば也。國粹保存論、及び、國家主義論の能く猛烈なることを得たるものは、西洋熱の倘ほ流行せしが爲めにあらずや。西洋熱倘ほ生存せり、此時に當りては、基督教の傳道なるものは、倘ほ一大勢力の援護を受けつゝありし也。世人が、基督教界に對して、分外の見込を立て、甚しく之を重別したるものは、即はち其の勢力の大なることを感ぜしに由る。此時に際しては、傳道者たるもの、其個人の勢力以外に或る勢力の合助を得たり。彼は、倘ほ分外の取扱ひを受けたり。

故に、國粹保存論大に動き、國家主義論、亦大に行わるゝの時に方りては、傳道者たるもの、倘ほ一種の勢機に乘じつゝありき。固より大勢の末流たるに過ぎざりしとは云へども、而も倘ほ大勢たることを失なはざりき。嗚呼、此の末流も遂に悠々たる太洋に入れり。反動の止む時は、原動の消たる時也。國粹保存論も何日の間にか聞こえず、國家主義論も、大方た聞かれたり。此時や、即はち西洋熱の全たく醒めたる時也。西洋熱、全たく醒めて、基督教は、其の純然たる本色の實質を以て顯われんとするに至りぬ。

◎既に風雲なくんは、龍も人も同じく歩々行を爲さゞる可らず。今に方つての傳道なるものは、即はち、傳道者個人の勢力の結果の外に、何等の援助もなき也。其事業の成功は、事業に於ける通常の規に隨がつて生ず。彼れ、熱心ならば、熱心の結果あり、彼れ、技倆あらば、技倆の收穫あり、彼れ有德ならば、有德の感化あり。其の傳道の効果なるものは、適に、其個人の人物相應たるに過ぎざるべし。此時に方つては、傳道は、演說の如く、亦た教育の如し。演說の巧拙によ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

つて聽衆に影響し、教育の强弱によつて、學生に感化するの因果を知るものは、今の傳道者が事業の盛衰を判知するに於て、何等の異例なきを覺らん。

然るに、世上往々傳道の不振を奇しむものあり。吾人は其の奇しむを怪しむ。方今、有德の傳道者あつて、而して其の德に懷くもの少なきの異例ある乎。達辯の傳道者あつて、而して其辯を聞かんとするものの少なき異例ある乎。下品陋劣にして、人の師となるに足らざる傳道者ありて、而して之に來り學ぶ者の少なきは異例なる乎。常に無味不明の演說を爲す傳道者ありて、而して之に來り聞くものの漸やく減ずるとなきを得たる異例ある乎。もし此等の異例なしとせば、即はち傳道界にも亦た尋常因果の法則の行われつつあるとを覺知すべき也。

もし夫れ佛敎の寺院に於けるが如く、住僧の德を慕ふて來集するにあらず、單に習慣により、心持により、自己のたしなみによりて來るが如く、聖安息日の都度々々、別に儀文、禮拜の式あるが爲めに、もしくは、既に習慣となれる心持の爲に來集するものに於ては、必らずしも、傳道者の賢愚、德行の何如んによりて、來るとを增減せざるべし。これ、基督敎界の形式禮拜多き宗派に於て現に見る所ろの實際なりとす。夫太陽私照なし、天法豈に偏せんや。傳道界に於ける方今の形勢は、正に當然の結果なる耳。

◎然りと雖ども、波瀾、起伏は、人世進步の爲の要件なり。故に、宗敎は、時世と共に變遷し、一代の風雲に乘じて、時あつてか、一大改革を起す。斯の如くして、人情を刷新し、宗敎の心を復活せしむ。こゝを以て、預言者時に下り、一世の大傳道者、機に觸れて起つ。彼等は、實に已むとを得ざるの時に起こりて、已むとを得ざるの宣言を爲す也。其の言、當世の時弊を刺し、其の主張する所ろ、當代の病根を醫す。眞とにこれ天之を下し、世之を迎へ、一代の宗敎界、渴仰、佇望する所ろの大聖使也。

この大聖使、當代の爲に切言主張する所ろのもの、後に遺傳しては、宗派となる。既に宗派となるときは、大率ね、形式となる。其人亡びて、其の精神の失せざるものは、希れ也。瀕々たる宗派の人は、大抵、宗祖の志を知らず。宗派の害なるもの、即はち是れ也。

大

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然れど、無意識的に一新宗派となるべき新宗派は、必らずや時に勃起せざる可らず。これ、大に已むを得ざるの時に生起する所ろのものにして、即はち、一大風雲に乘ずる所以のもの也。もし夫れ、一大風雲に乘ずるの時や、金石も亦た叫び、啞者も倘ほ預言すべし。驚ろくべき大傳道の時機なるものは、即はち此の時機也。

此の時機、何の時に來る。吾人は、必らず其の來らんとするとを知れども、其の何處より來り、何處に行くかを知らず。而して、只だ知る所ろのものは、此の時機の來らん日迄は、傳道界の形勢、依然として今日の躰裁ならんと是れ耳。之れ豈に驚歎すべきものならんや、人の事業の常數は、皆な即はち如斯く也耳。

拿破崙第一世とペスタロチー

(戰爭と敎育)

櫻井鷗村、

拿破崙一たび虎嘯して歐洲悉く震駭し、遂に破竹の猛威を積んで參政首座の位に陞りつ、其實既に君主の專權を抓みたるの後四年、其帝冠を戴くに至りし前一年、正に千八百三年の事とかよ。瑞西國政府は幾多の代員を巴黎府に使せしめて、國事善後の方策を商議せしめしとありき。名士濟々たる此代員中には、其頃未だブルグドルフの古城に、少年子弟を聚合して、之を敎育するが爲に人情の赤心を燃やし、至誠の熱血を振ひ、斯道唯よく國家をして彊大ならしめ、人性をして自由ならしむと確信し、主義最後の勝利を希望して、身命を塡坎窮逼の間に奏じて、孜々歐洲文明進步の車輪を一旋轉せしめつゝありし、彼偉大なる敎育家ペスタロヂーも員に備はりたりしが、一時施政の方針よりも、安國永久の方針に大事あるを達觀し、而も言ふ處行ふ處みな人道の擴充に在りし、ペスタロチーなりければ、情として祖國の爲些の憤怨なきと能はざりけん、其佛國の事なれども、なほ此國百年の大計を慮の餘り、否寧ろ人道の敎育に忠誠なりしより、拿破崙と會見して、己が熱血を凝らせる敎育の大道を說き、以て益を鼓に致し、國本の培養を得せしめんとするに切實なりしも、兵力と政略との强威を重ねんとするに汲々たりし拿破崙は驕見

深く敎育の重大なるを曉るに至らずして、ABCの問題よりもなほ他に考察すべきもの多きに煩忙なりとなして、この老敎育家が至誠を遇するに頗る冷淡なりき。たゞ幾何學の大家モンヂーなるものをして、彼が道を聞かしめしと雖も、大言は俚耳に入らず、モンヂーは彼が處論持説の遠大深妙なるに驚きて、『是れ予等には過大の事なり。』との一言を以て、ペスタロヂーの汗血を酬いなからしめき。災禍は常に幺微なるに發す。ペスタロヂーのABCに耳を借さゞりしとは、當年の拿破崙に取りては極めて鎖細の事と思はれけむ、然れども知らずや、聖ヘレナ孤島の蠻烟瘴雨に殲びたる、悽惋悲痛なる彼が末路は、蓋し爰に淵源せるとを、而も拿破崙第三世がセダンの敗衂、加へてアルサス、ローランの割讓の大耻辱亦適に之に起因す。

拿破崙がかの一語は佛國百年の大計を誤りぬ。其後にも彼は屢ペスタロヂー主義の敎育策を聽くの機會ありしも、是が爲に佛國を開放するの雅量達見なかりき。拿破崙のペスタロチーに聽縱するを能はざりしもの亦故なきには非ず。瑞西の人情的偉傑が人民をして自由を獲せしめんとしたるに反して、佛國の武斷的梟雄は人民を愚鈍ならしめて之を壓服し、以て其君王たらんとするに存して、主義の差や宵壤も啻ならざりき。されば拿破崙にはペスタロヂーを以て、單にABCの小事を説くものとのみ想像せしかども、後に至りて彼の事業の啻に之に止まらずして、進んで個人の自由と發達とを企圖するものなるとを認識しては、いよ／＼之に同情を表する能はざりしのみか、剰へ『ペスタロヂーが徒はジェシュイット敎徒なるのみ。』と稱して嘲りを加へんとしたり。禍ひなるかな拿破崙、志よく天下を併呑するに足り、力よく人の邦國を強奪するに足りしかど、外己の武威權勢を擴張するに忙しく、內國力を銷靡するに急にして、之を培養するの道に緩なりしより、頭には佛伊兩國の帝王冠を戴き、足は歐洲諸國を蹂躪し其勢威の莫大なる、シャーレマン大帝と拮抗して輸するとなく、猶望蜀の大野心は、歷史上にローマ大帝國を再演せんとするに在りしも、此燦然たる功業の裡には、危機既に深く膏盲に侵して、彼自ら曉らざりしが如し。當年の佛國を顧察するに、腥血を以て國を漂はせし大革命の瘡痍未だ愈ゆるの隙なくして、拿破崙が野望の戰爭となり、廿年の間國民を野

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に屠戮するに多忙にして、國本の培養を顧みず、家に殘留して子孫の繁殖に務めたりしものとては、勢ひ老衰癈疾以て劍を負ふに堪へざるものと婦女とのみなりき。其婦女とても國家多年の擾亂よりして、道德の腐敗に感染し、智識なく、德操なく、既に健康なる子孫を產むと能はざりしが上に、亦之を敎育して勇壯なる國民を生ぜんとは失望なりけり。此時や万事を擲つて國民の敎育を振興し、以て國本培養に力を專にすべきに、策此に出でず、野望は達觀を蔽ふて、拿破崙は己が失計の爲に當然の報酬を受け、砂上に建築せる大厦の命數に陷りけり。

然るに普魯西國は一千八百六年、エナに於て拿破崙が大打擊の爲に國力を竭くして、大敗衂の慘憺たる狀態を招き、王國殆ど摧碎されしより、王フレドリッヒ、ウ井ルヘルム第三世は大に警悟する處あり。敗餘の國家を挽回するの術、唯敎育に在るを認めて、多年ペスタロヂーが熱血を注ぎて、天下に唱道しつゝありし、國本培養の最大原動力たる國民普通敎育を大に振起奬勵して、除に會稽の耻辱を雪がんと欲し、

『吾人は領土と國力と國光とを併せ失へり。吾人が外に於て失ひたるものは、之を內に於て償はざるべからず。故に予の尤も國家の爲に希望するものは、力を國民の敎育に專らにし、大に之を振起せんとなり。』

と熱心燃ゆるが如き聲を叫破して、王國千載の計を定め、獨乙帝國彊盛の源泉を開きぬ。又王の輔佐としては賢明なる皇后ルイサの王國恢復に大なる內助を竭くすありければ、普魯西は外敗餘の慘狀ありて、內に鞏固拔く可からざる國力の根本を形成するに頗る其道を得たりき。ルイサ皇后はウイルヘルム大帝の生母にて、大帝は年老いてなほ其母后を慕ふてやまず、母后てふ一念は大帝をして、國步の百難に臨んで毫も沮喪せしめざりしといへば、其賢明なる女性なりしとの思ひやらるゝなり。獨乙帝國の今日あるも、此皇后に負ふ所夥々ならずといふべし。皇后曾てペスタロヂーが著書『レオナルド及びゲルツルード』を讀みし時、其日記に註して如くぞいはれける。

『妾は「レオナルド及びゲルツルード」を讀むに興味津々として竭きず、思ひを瑞西の村鄕に馳せて轉た歡喜に堪へざるなり。妾の身分の己が好む儘になすを許すならんには、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

車を驅りて、瑞西にペスタロチーを見んものを、さらば溫き心を籠めて彼と手を握り、涙を流して感謝の情を述べんものを。…………彼が同胞人類の幸福の爲に、心を竭くし、力を竭くせる、其熱心善意の程の那計なるかよ。然り人道の名によりて、妾は此赤心を擧げて彼に感謝す。』

後年ツエレアの、クヱニッヒスベルヒにペスタロチー教育法を實施せんとて來りしや、皇后甚だ意を之に留め、屢〻其學校に臨御して、親ら得失如何を研鑚ありしとぞ。ペスタロチーを普魯西に紹介せしものは、彼大哲學者フヒヒテにして、フヒヒテ素より交誼を此老教育家に厚くし、嘗に彼と會合せしや、其教育の精神及び方法の眞理なるにいたく、感激して、自ら之を獨乙に紹介するの勞に任ぜんヿを約ししが、祖國大屈辱を受けて、時勢國運の教育を要するに切逼なりしより、フヒヒテは千八百七年より翌年に亘りて、伯林府に數回の講筵を開き獨乙國に告ぐと稱して、盛んにペスタロチー教育主義の利益を說き、教育は國家をして富彊ならしむる唯一の方略なり、普通教育を改革せんとするに當りては、ペスタロチーの主義を以て其基本となすは、尤も健全安固の方針なりと唱述したりき。

外劍戟に由りて蒙らされたる大耻辱を雪がんは、內盛に國民教育を獎勵するにありとの普魯西國是は、ペスタロチーの勞力と精神とを假るを必要として、同政府は千八百〇八年に、秀才十七名をイブルツンに派遣して、此至誠なる教育者が許に就きて、熱涙に由るの教育策に親炙せしむるに至りき。此等秀才をペスタロチーに依托して、其薰陶を仰がしめたるとき普國宰相の彼に送りたる書簡なりとて今に傳へらるゝものを讀むに、其中にいへるヿあり、

『書生等が將來執るべき高貴なる事業の爲に、單に心念及び判斷力を培養するのみならず、加ふるに其情念を修養せんヿを望む。尙彼等が其職分を以て神聖なりと感ずるの念慮と、君が一命に捧げたるの事業に對する、清新なる熱意とに滿腔の精神を傾注せんヿを欲す。』

其熱心と希望とは啻ならざるなり。なほ書簡にいへる處を以てすれば、普國王のペスタロチー教育策に意を用たるの頗る大なりしヿを知るに足る。國勢の隆興は爰に其根蔕を固くし、佛獨の運命の勝敗地を易へんと既に其機を啓きたり。普魯西

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が如斯く敗殘の王國を收めて、全力を國民教育に注ぎ、以て國力培養に努めて、曩きの大耻辱を雪がんとするに、臥薪嘗膽の情ありしを、拿破崙は愚にも曉り至らずして、其ウーターローに運命最後の決戰をなせしや、たゞ其彊敵のウエリントンなるを知りて、既に己の鋭鋒を以て、枯朽の如く摧碎したる普魯西の俄に彊大を致して、鋭利當るべからざるの大敵たるに至らんとは夢にも知らざりしなり。拿破崙の滅亡は普魯西の大に預りて力ある處なりとせば、其彊大は國民教育の功に外ならず、ペスタロチーが事業は啻にＡＢＣに止まらずして、遂に拿破崙の暴威を覆したり。

普魯西が教育を以て國是の大方針となせるに際し、他の獨乙諸邦も亦ペスタロヂー主義を歡迎して、大に國民の教育を振起し、國力の養成に務めしが、其積勢の約する處、國是日に熾んなるを加へて、千八百七十年に至りては、普露西を盟主として、拿破崙第三世の猛威をセダンに摧きて、アルサス、ローランの二州を奪ひ、歷史上雪ぐべからざるの大辱を佛國民の上に蒙らしめぬ。拿破崙第一世既に亡びたるの後も、佛國の方針重きを教育に置て、國力養成に注意すると甚だ乏し

かりしに、またもや野望勃々たりし第三世の起るありて、國本を銷磨して之を償ふの道に怠りたる、其失策は禍ひを降して、己は悲淚を呑んで素車白馬出でゝ敵の軍門に劍を棄て、國民大首府を圍まれて、城下訂盟の恨みを千載に呑むの佛國當代の教育家をして憤慨慷嘆の餘、國民的教育を絶唱せしむる所以畢竟拿破崙第一世のペスタロヂーがＡＢＣを輕々看過したるの罪、禍を酬ひたるに歸するに非ずや。

獨乙帝國を聯合したるものは夫れウヰルヘルム第一世の英智によるか、宰相ビスマークの才略によるか、將軍モルトゲの武勇によるか、其實を擧げたるは素より彼等明君勇將智臣が鐵血政畧の力に在りと雖も、是が根抵を築きたるものは、今世紀の初めに、普魯西に教育の大道を敎へたる彼瑞西國の貧弱窮逼なる村夫子ペスタロヂーの力に在りと信ず。ペスタロヂーの門下盛んに獨乙の爲に名士を生じ、中にも地理學者リッテル、教育學者ヘルベルト及びペスタロヂーに繼いで天下教育の改革者たりしフレーベル等の起るありて、獨乙の諸邦に國民の教育の大道を唱へ、國力是によりて愈々強大を重ね、社會いよ／＼富盛なるを致し以て獨乙聯邦をして牢固ならし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

め、なほ是が爲に千載の大計を備へぬ。獨乙の天下に雄視する所以は其兵力の强大なるによる、然れども其兵力の强大なるは、國にペスタロヂーの遺法あるを以てなり。將軍モルトケ曾ていへるとあり、

「自由敎育の利たる單に科學を敎ふるに優ると万々なり。智識のみよく國家に奉ずるに必要なる獻身の念を養ふと能はず。上に威權あり、下に服從あり、以て訓練を行ふは、軍隊の全精神をなす。我軍隊をして三度び戰勝を制せしめたるものは此訓練の力なり。」

史鑑の照す處によりて察すれば、佛獨勝敗の因、實に敎育に由る。國家强弱の度は敎育に存す。敎育なるかな、國家一日之を緩にせば不測の笑ひを招かん、殷鑑遠からず拿破崙に在り。彼普魯西が戰敗の耻辱に懲りて、敎育を盛んにし、以て强盛なる獨乙帝國の基を開きたるは、實に史上の美事と稱すべくして、フレドリッヒ、ウヰルヘルム第三世の明智は千載の摸範なり。我日本戰勝の結果として平和克復に到達したるの今後、勝ちて兜の緒をしむべきの法、蓋し眞正なる敎育を振興するに在り。殊に國民各々戒心して誓つて後年を期すべきの大事あるに於ては、豈に心を一事にして國民敎育を振興せしむるとなくしてあるべけんや。國本培養は戰後最大の急務なり。國民敎育は最後の戰勝者なり。

○明治廿八年四月十八日

清國媾和使李鴻章來了媾和條件捺印

八木文卿

馬蹄蹂陷鳳凰城。倒海殷雷龍國驚。
艦底春寒使臣膽。煕然紅旭映山櫻。」
白樹墨痕書赤心。芳山櫻井恨愈深。
花神遠施征淸捷。慰藉英雄記古今。」

○夏山林館　同

水有香魚山蕨薇。新林光景夏方肥。
風笙雷鼓浮生夢。蜂劍蜘絲害物機。
詩書常賴爲貧力。月花未必與心違。
殘書點罷斜陽在。獨立高樓待鶴歸。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

凱旋に對する家庭の歡迎

私に死し公けに生き、万死を出でて一生を遺こせし勇武絶倫のわが軍人軍屬は、遠からず凱旋して、各地各戸の吾が家庭に入るべし。

家庭の人、それ如何にして之を歡迎せんとする乎。

試ろみに、朔北凛烈の地に苦戰せし勇士の難澁を念ひ見よ。家に留守せし人の安樂は、天國に住ひしにや比ふべからん。たとひ男子の遠征に、遺族、なにほどの困苦を爲したるとありとするも、生命、朝たの露より脆ろく、不自由、荒原無人境に住ふよりも尙ほ甚だしかりし軍さ人の身の上に比較せば、懸隔の遠きと、天と地との相距るよりも遠かるべし。故に、家庭の人は極樂に留守し、遠征の人は地獄より歸りしものと見做さんこそ、第一の覺悟なれ。須からく、留守中の安樂を感謝して、ひとり夫丈の苦しみたるを勞らふべし。かりそめにも、留守中の難儀などを訴ふる莫れ。啻だに訴ふ可き價値なきのみならず、素と訴ふべきものにはあらず。戰かひの苦しみは、寧ろ勇士の歡こぶ所か、樂しみ其中にあり。彼が尤とも堪えがたきの苦痛は、家庭の不愉快にてあるべし。家庭の人は、敬重すべき丈夫に、今は此種の不愉快を毫も感ぜしむべからず。

訴たへず、爭そはず、美くしき言語のまことを以て歡迎するは、その第一なりと雖ども、家庭の麗わしき調和を示して、極めて安心せしむるの方、次には尤とも肝要ならん。勇士は虎を睨殺するの眼に、情けを含むの涙をかくす。公けに激するとき、首を切ること草を切る如く、血を流す所ろ、汗を流すより容易なりしが、敵すでに降り、平和克復して、熱血沈靜し、今はた人世の無情に感じて、物の哀れを思わんとき、遂に夫れ家庭に爭語を聞き、風波を見、玆にも亦た戰かひらしき修羅のあるとを見るに耐へんや。戰場の巷と違ひて、親和の空氣温然として充ち、人情の花滿開し、人々相ひ微笑ずるの樂境に逍遙遊せしめば、勇士は初めて戰かひを忘れて、其の苦を消すとを得ん。家庭の人は、心して和樂團欒の狀を

とゝのへ、就中、幼なき子等をして、尤とも親しく相睦むの愛交に熱せしむべし。勇士、戰ひより歸りて、家庭の團欒を見、其が子弟の相ひ睦むを見る、快樂之れにますものあらんや。

遺恨十年の盟ひ、今後の國是人みな之を知らん。心より心に、胸より胸に、相傳えて固く約する所ろのものは、速かに兵備を整のへて、大に國の武力を增すの一事にあり。左れば、勤儉と尙武とは、國の大方針にして亦た家の憲法ならん。武士の妻が覺悟する所ろ亦た他あらんや。然れど、之を以ての故に、男子に肥肴を呈して、其肉を肥やすの勞らひを忽諸にすること莫れ。奢りとは、無用の費を言ふ。丈夫大ひに太とり、勇氣燃んに加はるは、即はち一種の武備、一種の兵力にあらずや。家庭の婦女子は、其男子に馳走することを怠たる莫れ。凡そ、勇士が平生に養攝するは、事あるときに大不養攝を爲さんが爲め也。こゝを以て武らひは、冷水をのまず、勇者は食物を吟味す、これ其の大ひに戰かはんが爲め也。故に、婦人は、或は方面に於て大ひに勤儉し、十分に家政を切りつむるとも、一方、其男子に美肉肥肴を呈することを廢する勿れ。

况んや、遠征の人、大率ね、肉やせ骨枯れたるをや。今に於て血色の紅きは、たゞ其の氣と其精神との故のみ、衞生上眞實の健康は著ぢるしく傷害せられたりと知るべし。故に、家庭目前の歡迎は、奢を避けたる十分の馳走にあり。

今にして初めて着手すべきことならねど、此際全たく整理し置くべきは、不在中の記錄、覺書の類これ也。見舞の人の名、送り物の品の數、市內町村の同情の形跡、何月何日の喜ばしき出來事、もしくは不在中に起りし近親知人の變化、及び、其の通信、並びに此の半年間の新聞雜誌の類は、悉とく整理して、潔よく順序たて、平易快樂に閱覽することを得べき便利に處理して、以て遠征不在の人の回顧紀念を喚起し、其の喜こびを增加し又永續するの手段を取れよ。家を去つて久しきものの夢幻覺不覺の物思ひは、速やかに家族の顏を見んとすることこれ也。此の望み海より深く、山より高し。もし其の顏を見ば、言ひたきこと、聞たきこと、流を決する如く多く、海に入る如く廣大なりと想像されつゝも、扨て現に其顏を見て、千万無量の熱情を、見かわす眼中に於て相交ゆれば、電氣既でに交通し、心氣乍まち平均し、意外迅速の和らぎを生じて、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

暫時にしてもはや滿足せる如く感ぜらるべし。然れば、此のあまりに早く滿足し得たる滿足は、不滿足の種にて、何となく物足らぬ心地のするもの也。此に於て、循々として不在中の出來事を聞き。日に日に、一一。不在中の人の好意を回顧すれば、悦喜長遠にして、幸福十倍すべし。此の歡こびを呈するも亦た家人が待ち受けの一方にあらずや。

不在中の家庭の人は、定めし儉約もしつらん、又た遠征者の辛苦を思ひ遣りて、特更ら難儀もしたらん。左なきだに、悶思冲々の憂ひあり。人々、大ひに疲勞して、必らずや大ひに瘠せたるべし、定めて衰ろへし面貌あるべし。かゝる顏色を以て長き不在の人を迎ふるは、第一に其心を痛ましむるもの也。戰はやみて、征客近く歸らんとす。戸々の家人今は最早や滋養して速かに爽快の顏色を復し、愉快のやうすを呈して、遠く歸りし人の心を慰さむべし。

遠征の人歸りし當坐は、其の戰功の談を聞くと多かるべし。万事を措いて之は聞くとの家人に取りて第一の樂しみたるのみならず、之を語るは、歸りし人に於ても亦た無上の喜こびなるべし。左なくとも、其の莫大の勞を慰さむるが爲めに、

亦た一家無事の祝福を大賀するが爲めに、歸朝後の一二ヶ月は、戸々の家まさに閒雅の餘暇多くあるべし。歸朝早々、一家の用務忙はしく其處此處、取みだれて、待ち受けし餘裕の見へざるなど、歸朝者の太はだ不快とする所ろならん。家庭の人、衣服の縫ふべきあらば、早く縫ひ了えよ。洗ふべきあらば、早く洗ひ了えよ。命ぜられしとにて、尙ほ仕のこせしとあらば、速かに片付けよ。惣じて、用務を先越し、一二ヶ月分は、豫じめ處理し、遠征の人恙がなく凱旋するを迎ふる後ちは、家に十分の餘暇ありて、長閑けき春の長き日の戸内にかゞやくが如くならしむべし。

家内の裝飾、庭園のはききよめ、馬やの修復、祖先墓地の掃除、は言ふに及ばず。遠征者の愛好せし草木花果、器具、手道具の類は、可及的、とゝのへ、試ろみに身を遠くより歸るの人として、「吾ならば如何にせらるゝを好む乎」の自問を發して、一世一代の歡迎法を思案すべし。凱旋者を迎ふるは、即はち國家の有功者を迎ふる也。國家の有功者を吾が家より出し、而して、其今ま吾家に歸らんとするを迎ふ。人世の慶福之に過るものあらんや。歡迎せよ、歡迎せよ。

（一七二）

尙武と婦女子

雄鷄を見よ。肉冠を頂だき、翼鎧をよそほひ、旗尾を押し立て、距をみがき、揚々、堂々として敵を禦ぐの慨あるものは、何によりてぞ。豈に、其牝鷄の爲めにするにあらずや。大凡そ、昆虫禽獸の雄牡が、身に武具を裝ひ、敵と戰かふの備を爲す所以のものは、皆な其の牝雌の爲めにするにあらざるはなし。牛の能く突き、馬の能く蹴るは更にも言はず、螳螂の斧をかざし、蟋蟀の眉尖刀を揮ふに至る迄で、何れか一片の優にやさしき心掛のあるに由らざるものあらん。

博物學者いわく、人の心理は、生物界の道理と相似たりと。惟んみるに、陰陽は相ひ勵まし、剛柔は互ひに生かす。武たるものの、美によりて刺激せられ、美なるものの、武によりて温柔にせらるるとや、蓋し雌雄、牝牡、男女のすべてに通存せる天則か。

故に、男子をして、男子らしく、丈夫をして、偉丈夫らしくあらしむるに尤とも勢力あるは、優しき女性が一瞥、一語の刺激にあり。むかし、勳爵士が天下に横行して、柔を扶け、剛を挫き、一身を鐵壁にして、あらゆる敵に當りたる所以のものは、ひそかなる邊りに、人知らぬ詠めのありたれば也。沙翁、この心を歌ふらく

She loved me for the danger I had passed,
And I loved her that she did pity them.

故に、猛虎を手どりにする大丈夫も、女の髮の毛に引かれ、衆口の囂々を物ともせぬ偉男子が、弱性の趣好に動かさるる例し多し。

此を以て、尙武の氣風を男子の間だに隆んにする一秘訣は、先づ婦人界に其の同情を起すにあり。

左れど、婦人が正當に好む尙武の趣味は、元と健全にして、清楚なるものなり。彼等は、決して、華美優柔の躰を好まざる也。たゞ夫れ、遊里、花街の風流に染まり、一と度び健全なる女性の品格を失なひて、伊達、派手やかなる花車の趣味になれたる族は、尙武を武骨と云ひ、剛健を田舍風として、則はち、硬骨男子の凛々しきを嫌ふ。凡そ、如此き變形婦人が好み世に行はるゝときは、尙武の氣、地を拂つて失せん也。女界の好尙なるもの、影響する所ろ甚はだ大也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然るに、我國の上流と言はるる邊りには、意外に風流界より身を潛寄せし婦人少なからず。而も、現に、風流を流し、花車を廻はす一方の世界は、存外、此世と接近し、如何がはしき好みの風、上より、隣より、吹き來るとつね也。左れば、健全なる婦女子の好尚をはやらせて、其の感化を行き渡らしむるには、別に備へして、大に盡す所ろなくんばある可らず。然らざれば、艶なる花の目立ち易く、強き香りの薰ずると早きが如く、ゆかしく、しとやかなるものゝ未だ顯はれざるに、既に下等なる趣味の廣ろらかに流行彌漫せるを痛歎するの日あらんとす。

雜草先づ茂るときは、佳木育たず。佳木、先づ茂るときは、雜草、長じがたし。好尚、趣味の流行も、亦た機先を制するとを要とす。尙武に於ける婦女子の感化を健全にせんと欲せば、今よりして早く備ふる所ろなかる可らざる也。

柔よく剛を制し、軟よく硬に勝つ。

軍人慰藉會

凱旋の將卒は、國民も、家庭も、之を歡迎すべし。半年の大困苦は、數日をもつて拭ふにあきたらず。國民も、家族も、必らずや、十分の用意ありて存せん歟。

たゞ彼の常備現役の兵士や、家ありと雖ども歸る可らず、鄕友多しと雖ども親しみ近づくべからず。彼等は直ちに其の兵營に入らん也。

兵營もとより苦の家にあらず、然れども亦た樂しみ多き宿舍にはあらざる也。たとひ、巨万の産ある富家の子なりとも、朝暮自から万事を處理して而も尙ほ古兵の爲に奴僕の如く仕かへざる可らず。幸はひに素と貧家の荒仕事に身を鍛えたるものなりとも、兵營の規律は、嚴密にして座臥出入太はだ窮屈ならん、彼等に於ては、尤とも樂しみ少なしとする所ろなるべし。

抑も、新兵の新たに徵されて、營舍に入るや、學問も、見識も、何等の用を爲さず。むしろ、之を以て自負するものは、大いなる損害を受けんとす。彼等は、只だ、從順なるべき

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

耳、彼等は、只だ器械の如く運動すべき耳。日々の操練は、全身を疲らすに足り、夜間の眠りも、心を許すヿを許さず、二六時中、寸暇もなくして、尙且つ古兵の爲めに仕かへざる可らず。一週わづかに二回の外出を許さるれども、何處を當てに行くべき場所もあらず。よしありとも、僅少なる小遣錢は、遊樂の餘裕を與へず。若し夫れ、歸りて面白からず、行きて目あてなく、たゞ公園か、町々かを散歩して、幾回も往來し、通常人の群集には、意味ありげに立とまり、小兒小女の無邪氣なる遊び事には、餘念なく打ながめ、心に鄕里の樂しみを念慕しつゝ、うつとりとして、行き通ひつゝある新兵の狀態を見れば、涙あるものは、ひそかに袖を絞らざるヿなし。左れど、此すら、彼等に取りては唯一の快樂なり。兵營舍內、食後、寸刻のいとまある時、もしくは、暮色暗淡として、たそか彼れかと物思はるゝ頃ろ、一鳥の自由に飛んで、ねぐらに歸るを見、月の故鄕の方より出でんとするなどを詠めては、五尺の男子も、腸を斷つの歎きあるべし。或人の曰く、營內に於て、兵士等、二三人會食すれば、其の香の物をすら羨んとす、彼等の羨るヿを樂しむは、室家の幸福を思ひ起して也と。有情の人にして、之を聞き、泣かざるものありや。

一八

兵士の慰藉なきヿ、如斯し。されど、人は、到底、慰藉なくして止むヿ能はざる也。こゝに於てか、兵營に慣れ、規律に熟して、自づからに餘暇を生ずるの時節。もしくは、外出散步の秘決を自得して、元の如く時刻にビク／＼とせず、不思議に時間を利用して、之を長ふするの工夫に經驗せる年代となれば。彼等は則はち忌はしき方角に於て、其の慰藉を求むるヿを初む。されど、渴者に淸飲を與へずして、其の濁水を汲まんとするを責むるは、寧ろ無情なり。有志、營外に淸潔なる慰藉を施こすヿを爲さずんば、彼等の足の暗黑に向ふを禁むるヿ能はざるなり。

左らば、慰藉とは、何如なるものをか要する。曰く、其の尤も備はれるものを與ふるに越したることなきは勿論なれど、極めて淡泊無雜作なるものを供ふるとも、尙ほ能く非常の悅喜を與ふるヿを得べし。蓋し、兵士が唯一の快樂は、一週二回の外出にありて、外出に尤とも遺憾とする所ろは、其の行くべき目あての無きにあり。故に、此時、其用にあてたる倶樂部の如き場所ありて、之に掛念なき休息所を供え、氣樂に、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

上衣を脱して、横さまに足を伸すことにても得せしめ、尙且つ、茲に老實にして親切なる老婦人などありて、兵士を孫の如く見做して朴實に世話し、其の來る都度々々、舊熟知となりて、兎角の談し相手ともなり、必竟、ホームの分子を幾分にても供えんには、無味、乾燥、砂の如き無情の所ろに勤勉して、三年の長日月は、到底、家なるものに往來すること能はずと定まりたる兵士の身に取りては、非常快樂の感、世のつねの人の決して想像すること能はざる程なるべし。如此くんば、一杯の澁茶も、三枚の鹽センベイも、飾りなきむくつけき言語の挨拶も、兵士が心には、一種の電氣を通じ、不思議なる慰藉、之よりして湧き出んとす。

加ふるに、茲に、新聞、雜誌、もしくは、面白き讀本、爽快なる繪畫、寫眞など備えられ、尙且つ、淡泊にして無邪氣なる種々の遊び道具用意せられ、兵士の心あるもの、惣べて氣樂に茲に來り、無料にて遊樂することを許されなん。

更に望ましきは、有志の音樂會などありて、清楚にして勇氣あり、有情にして純潔なる音樂、吟歌、奏せられ、かの倶樂部に往來するものを特待せんとなり。

惣じて、如此き計畫にして、有志婦人の發起に成り、たとひ婦人諸君は、直接にかの兵士に會せざるも（むしろ、會合せざるを可とす）、其の同情によつて企圖せられ、其の愛心によりて維持せられ、有志婦人は、國家の現役兵の爲に、慰藉を呈するものなりとの眞情、兵士の肝膽に照らされなば、たとひ直接に其の快樂を味はふものは、少數なりとも、心情の滿足は、全軍人に行はれたり、氣合の慶謝斜めならず、感激して身を潔よくし、奉公の念を發揮し、一入、尙武の志を奮立せんこと明白なり。

惟ふに、有志婦人にして、至誠、此計畫を發起し、贊成を天下に求めなば、義捐合力するもの響の聲に應ずるが如けん。如此くして、六團のある所ろ、各隊の營する所ろ、各地に相應の軍人慰藉會なるもの設けられ、軍族諸士の婦人はもとより、市町の上流にある家々の女性は、皆な一躰に之に同情を表し、第二の赤十字社の如き大運動を天下に施き、四方相應じて一種の輿論を喚起せんことを望む。

嗚呼、この計畫や、情に於ては、吾が國家の現役に從事して、同胞四千万に代り常備の勞苦に耐へつつある吾等が兄弟を慰

藉するとを得べく、更に大觀し來れば、兵士の純潔を維持し、國家尙武の氣象を煥發して、大いに武力を伸張するに於て甚太の効あらんとす。有志の人、何んぞ奮つて、此の美なる計畫に從事せざる。而して、此計畫の發起は、實に今日を以て最良機會となす也。

男女別學の得失（下）

（註）小學校に於て男女生を分つの得失一覽表。

新潟縣町立水原尋常小學校

得、人の笑を恐れざるを以て聲を小にせず質問を憚るとなきか如きの利あり

失、兩性の調和によりて得べき諸利益を失ふ即女子柔弱の性を矯め嫉妬（云ふを得べくば）の情を減ずるの機會を失ふが如き是なり

群馬縣公立伊勢崎組合高等小學校

得、男女共學の時は管に監督上困難なるのみならず授くる學科目並に授業時間を異にし（裁縫唱歌家政等は女子のみに課し讀書算術の時間は女生にありては男生より少なし）又日常の作法作文の文脉等多少趣を異にせざるを得ざるを以て男女を共に教育するときは管理授業上共に種々の困難あり然るに女子のみを教育するときは是等の困難を見ず

失、認むべきものなし

奈良縣公立郡山高等小學校

得、女子に適當なる教育を施すを得るを得且各學科の教授に於ても之に伴ふの利益あり

愛知縣津島高等小學校

得、女子の性質に應じて其智德を進め身躰の發達を催すに最も適當したる方法を撰ぶを得、學科の授業上女子に適當なる事項を授くることを得

山梨縣尋常師範學校附屬小學校

得、女子は性質習慣等に於て男子と異なるのみならず卒業の後世に處するの務も亦相同じからず而して女子のみなるときは躰育智育德育美育等女子に適當なる事項及方法を撰ぶことを得るの利あり

失、認むべきものなし

長野縣、長野高等小學校女子部

得、教員は公平の處罰採點をなすも共學せしむるときは男子は女子に緩にして男子に嚴に女子は又男子に緩にして女子に嚴なるかの如く感じ兒童間の不平を惹起すかの憂あれども別に教育するときは此憂なし、共學せしむるときは受持教員は勢男子を目的とし女子を度外として教育するの恐あれども別に教育するときは此弊なし、共學にては學科の斟酌をなすに困難なれども別に教育するときは自由に之をなすとを得、管理訓練上甚だ好都合なり。

失、認むべきものなし

同、長野尋常小學校女子部

得、前項高等小學の項に掲げたると異なるとなし

失、認むべきものなし

同、公立松本尋常小學校

得、女子に適切なる事項を撰びて教授し得べきこと、女子に適當なる遊戯を施し得べきと、男女各共腦力に相應なる教授をなし得べきこと、女子の德性を害する粗暴輕躁等の風を生ぜずして順良の氣質を養ひ得べきこと

同、公立上田尋常小學校

得、兒童を修業せしむるに厭忌の念を減じ從て就學を增加せり、兒童をして充分に運動遊戯せしむるとを得るに至れり、兒童の擧動をして自然に女子特有の風をなす、遠慮なく質問等をなすに至れり、中途退學を减少す、女子に適する教育を施すことを得るに至れり

失、認むべき條を發見せず

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

宮城縣、公立東二番町尋常高等小學校女子部
得、女教員をして始終受持たしむることの利あり、殊方は男子と大に其趣を異にす此點に於て女子を別に教育するの甚だ有益なるを認む各教科を授くるに當り女子に適當にして且必要なる問題を撰ぶを得るの利あり、低學年にして優順なる女子の性狀を養成するに尤も便なりとす、男女共學なるときは或教科（英語裁縫家事等）を授くるに際し受持教員を差繰せざるべからず、女子を別にするときは此煩なし

岩手縣、盛岡高等小學校
不調査

石川縣、公立高岡町高等小學校
不調査

同、市立田丸町尋常小學校
得、男女各其天性を異にす而して其性に從ひて教授上斟酌をなすの必要あり女子のみなるときは女子に適當なる教授をなすの便益あり
失、認むべきものなし

同、市立西町尋常小學校
得、失とも著しきものなし

同、市立石引町尋常小學校
得、男女共學せしむる時は競爭心を起さしめ女子の言語も明亮なるべしと雖も女子の特性たる美風を害ひ男子に壓倒せらるゝの傾あり然るに女子のみを教育するときは此弊なし

同、蘆城尋常小學校女子部
得、男女を共に教育するときは女子に活潑の心性を養ひ思想を正確にし且之を明了に表出せしむるを得の利益あるが如く思はるれども實際は之に反し自ら男女の區別をなし却て不活潑の風を現はし言行動作のみ粗暴に傾くの弊を免れず故に男女各其性に從つて之を教育し殊に女子の優美の淑徳を養成せんには別に之を教育するを優れりとす

鳥取縣、公立鳥取市高等小學校
得、學科を斟酌して女子に適當なる教授をなし得ること女子らしき氣質を養成し得ると、全校兒童（男子部女子部）をして男女別あるの道を知らしむること、言語動作自ら溫雅に導き易きこと

高知縣、土佐郡第一高等小學校
得、女子の特性を充分に發達せしむるの利益あり
失、女子普通の弱點を矯止し能はざる如きは弊の一ならん

福岡縣、市立福岡高等小學校
得、學科教授上男女によりて斟酌を要するものあり修身作文理科の如し今女子のみを教育するときは是等の學科適當なるものは撰ぶことを得又殊方訓練上に於て男女其趣を異にし上級に至りて尤も然りとす而して男女共學せしむるときは一方に適する方法は他に適せず取捨折中甚だ難く勢ひ多數の一方に偏するを免れざれとも男女を別つときは此弊なし

同、柳河高等小學校
得、各學科教授上女子に適當なる教授を施すことを得、管理上に於ても男女同一にすべからざる點少なからされは男女を別にするの利多きを信ず、男女共學せしむるときは男子の氣質に感染し或は學科上に於ても男子と競爭するの利はあるべきも女子特有の優美なる天性を失ふの害あると多數男子の爲めに壓せられて知らず識らず卑屈に流るゝの恐なきにあらざれば別に女子を教育するを利ありとす
失、擧動稍沈靜に過ぐるの傾を生ず

熊本縣、公立玉名高等小學校
得、修身、作文、習字、歷史、算術等の諸學科に於て女子に適當なる教授をなすことの利あり
起居動作等靜肅優美の風を養成するの便あり
失、認むべき條項は未だ發見せず

沖縄縣、公立首里尋常小學校
不調査

仝、公立那覇尋等小學校
得、本縣の風習として男女の懸隔甚しく當地方に於ては到底男女混同の教育は施し難し故に當女子部の如きは學校設立の當時より別立のものなり從來の經驗に徵するに女子を別に教育するの學校に在ては學科の進歩緩慢を免れざるが如し。

（大　尾）

隨感

○透谷は生たり

一歳周り還り、青葉茂り、木の實やゝ熟せんとして去りにし故透谷の爲に憶起すべき時は來りぬ。失せ玉ひし比ろは、實に失せ玉ひしと、惜まれたるが、時の立つに隨がつて、人の影全たく失せ、別に靈姿を取つて斷えず心裏に現はれ玉へば、今はなか〳〵に亡き人とは思ほへず、常に吾等が感覺の間だに居まし、常住不變の姿を裝ほひ玉ふことは覺ゆ。眞とに、絕息斷末の境は、幽明の限りを明らかにし、反つて、人をして徒らに悲しましむ、吾等は、如此き果敢なき人影を抱かんとはせず、寧ろ、とこしえの紀念を感謝せんとす。透谷、今や、吾等が間だに生存す、何んぞ之が爲めに憾みんや。冀わくは、詩人を念ふに、詩の想をもてせん。去れよ、浮世の情、凡を以て仙を汚がす莫れ。乞ふ、無限の美によりて、無限の美を味はふことを試みん。

○こゝろの影

花の紅の色は、その趣むきに及かず。薔薇のほゝゑみの姿は、閉せる秘密に劣る。歌の聲うるわしけれども、調べの幽かなるに及ばず。吟詩の格巧みなりとも、凝めし意想の深邃なるに比ぶべからず。すみれの愛らしく育つは、不可思議の靈力之を伸すがため、川の快ちよく流るるは、大能の之を壓まねけばなり。シェクスピアの歌ふや、歌神別に舞ふことあり、詠言者の叫ぶや、大なる觀察渠が爲めに觀る。畫圖に臨みて、色彩を考ふれば、筆手彷彿として紙背にあり。立てる木像を撫でて語らんとすれば、何處にや彫刻者の心、動かんとす。悲觀、喜觀は、とこしえの感能にうつりて感ず、光榮の冠りは、冠りを賜ふべきの大御手より出でざらんや。嗚呼、形式。形式は、其精神に比べて小さく、造化の森羅万象は、一元の大靈に屬す。もし、音響の後ろに沈默あるを傾聽し、惠みの手のかなたに、其の神經あることを思わんとき、見べき世界は、見えざる天地の影にして、有形は只無形の衣に過ざことを知べし。此に至て、吾住ひの廣く、感喜の幽遠成ことを思ふ哉。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

あゝ天地、何ぞ其の宏崇なる。

○光明、何處より來る

階段あり。夜は、其の上、中、下、三處に掛けたる光明によつて照らし、晝は、素より、屋漏より射入せる日光をもて照らす。夜は、光明を置いたる所ろに立つとき、太はだ明るく、之を距る遠ければ、遠きほど暗らし。故に、登るに隨がつて、暗らきを增すヿなきにあらず。高きに登ると、明るきを增すとは、相同じきヿを得ざる也。晝は、段々皆な等一の光明あり、是は光明の地に屬せざるが故か、而も、其の精わしきを言はば、即はち、登るに隨がつて稍や光明を增すが如し。

○達人の論理

大躰の着眼、これ人事に至大緊要の處、品格の大ひに分るゝもの此にあり。其の爲す事の多きや、忙々焉たるものゝ必らずしも閑々然たるものに過ぎざるの所以、亦た此に存す。而して、此の大觀に熟したる偉人の識見は、もと此識見を企念し、鍛錬しつゝあるものゝ外は、悟入直覺するヿなし。左れ

ば、大局の偉觀を聞くときは、精神の爽快を覺え、天地の重きを加ふるヿを感ず、其聲凛々として清し、其義、大山の確立するが如し。若し、其人にあらずして單に推理憶測を語るとせば、聲と義と、言語と神膽と相ひ調和せず、一聞、乍まち其の不自然なるヿを感ずれども、其人にして、其語あるや、金石の自から鳴り、天籟の神々しく響くが如し、直ちに其の音の聖なるに打たる。嗚呼、紛々たる議論それ何するものぞ、達人は大率ね辯に慣れざる也。忽然として直覺し、斷乎として言ふ、これ至大至强の論理に非ずや。故に聞く者は、其力を感悟して、其理解を後にすべき鑑識なかる可らず。

○詩人の自殺

身を思想に隷屬せしめ、遂に自から殺すヿを爲すも、斷じて能く其の守る所ろに殉ずるは、氣節の雄勁なるものにあらずや。丈夫、佳人、もし之に倣ふあらば、寧ろ祝すべし。吾等は、其の倣ふものゝ尠なきヿを歎ぜんとす。詩人、美を慕ひ、美を念ひ、念々切慕して、悠然、渾然、一化して、彼の郷に入るとき、世人は則はち曰く、自殺せりと。豈に安くんぞ殺すヿ

の生くるヿを知らんや。經世家、憂ひて曰く、遂に此の不健全の摸倣者を増さんと。されど、杞憂を止めよ、世には自から殺す迄の摸倣を爲すに、輕々たる浮薄の徒はなきヿを。雲の飜がへるが如き褒貶と、雨の浸すが如き空涙とは、渠輩にとりて何んかあらんや。悠々たる天地、別にあるあつて存す、渠等は、莞爾として此に歸休するのみ。詩人、リチャード、レルフ將に自殺せんとして、一詩を遺す。詩の數絶に、

But Say that he succeded.　If he missed
　World's honors and world's plandis and the wage
Of the world's deft lacqueys, still his lips were kissed
　Daily by those high angels who assuage
The thirstings of the poets;for he was
　Born unto singing, and a burthen lay
Mightily on him, and he Moaned because
　He could not rightly utter to this day
What god taught in the night.　Sometimes Natheless
　Power fell upon him, and bright tongues of flame,
And blessings reached him from power souls in stress;
　And benedictions flom black pits of shame,
And little children's love, and old Men's prayers,
　And a Great Hand that led him unawares.

plant daisies at his head and his feet

曰く、其人にあらずんば、其人を知らず。是れ同情の眞旨義。

○親ごゝろ

十分の成長、十分の涵養、而して後ち、親となる。親は、後代のために吾に似たるもの、吾に代るもの、吾を續ぐものを遺す、これ其事業の冠にあらずや。故に、兒を産して尤とも健全なるの時は、即はち生理上親として完熟せるの時。兒を敎えて正に有効なるの時は、即はち智識上親として完備せるの時。親たるヿを得る、これ、眞との生産を爲すヿを得るの天兆にあらずや。人間、世に立ちて業務を爲す亦た斯の則を超えず、其の事業に對して、尙ほ壯士の如きものあり、或は單に論客の如くなるものあり、若くは只だ義務の爲として至つて窮屈なるものあり、或は專ぱら慷慨して只管に激熱するものあり、則ち、稱して、事業の爲に勉めたりと言ふヿを得るも、未だ以て之と同化せりと言ふ可らず。蓋し、樂境自然の境に入ざるもの、事業の爲に未だ其親とならざるもの也。人間、事業を爲す、豈窮屈のものならんや。たとひ之が爲に困苦すとも、困苦は眞とに其の樂しむ所、猶親が子に於るの煩わしきが如けん也。悶々たる事業家、何すれぞ、成敗利鈍の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

為めに、断えず、若かく澁面顰縮するや。親ごゝろ、是れ、至當至適のこゝろ、此の心より發せしめずんば、健全なる生產は未だ決して期望すべからざる也。何んぞ、たゞ生理上のみならんや、敎育亦然り。何んぞ只だ敎育上のみならんや、事業亦然り。如何んとなれば、皆な其「己」を後代に遺さんとするものなるが故也。

○墓まゐり

あやしく、とうとき感想を喚び起して、人をして幽聖の界に向わしむるは、知り人の墓に對せし時なる哉。草を除き、塵を拂ひ、淸水を滿々と手向けて、さて、線香の煙立ち昇るを見れば、墓石の微笑して、ゆるがんとするを覺ゆる也。幽明、所ろを異にすれども、居住既に定まれる心地して、悲哀の念ひ殆んど消え、只だ追念のゆかしさを感ず。かつて、雪池翁が「墓參最上の宗敎心」の談話を聞き、又、某が日曜墓參論を讀み、大ひに可しとすることを廢せざりしが、近頃ろ事ありて、之を思ふと切なり。實にや、一家の墓參は、其の神聖なる紀念日たるべし、もろ〳〵の殊勝なる感化、こゝより起らん。人情の不可思議なる影響、之に過ぐるもの多からじ。

○靈界公園の地

寢室の用意に冷やかなる吾等は、墓地の取扱ひにも亦た信切ならず。陰影の雅趣を味わひて、好みを奥ゆかしき邊りに寄せ、赫々たる太陽に歌はずして、おぼろ夜の月を慕わんとするものが、寺院の埋葬地にのみ、此の心掛なきこそ奇しけれ。詮ずる所ろ、寺院埋葬の制度に限られ、墓地の廣からぬに止みがたくして、自から心ならぬ習慣とはなりぬるなれ。これ、是等大和人の自然の情にはあらざるなり。冀わくは、墓地を敬重し、其の制度に注意し、人々多く往來して、之を靈性上の公園地となさんことを。況んや、國葬の人は、啻に其の葬送をのみ國家に於てせず、其の墓地をも亦た公同にせんことを。少壯の國民、この偉人の墓邊に逍遙し、春は落花、香氣薰ずるの朝た、秋は悲草、露を帶ぶるの夕べ、もしくは、夏日、綠陰々たるのかげ、冬天、白衣のしとねを一同に敎わんのとき、停徊し、沈吟し、濃やかに紀念の世界に入つて、悠々同化の交わりに結ばんこそ、望ましけれ。

殘影（舊稿）

賀古殘夢

世の人は何とも言へ、つらかりし昔の名殘を身にしめて、春秋の年月を、はかなく暮らすも、人間が運命のおもかげならずや、悲しきことも嬉しきことも、觀ずれば浮世と吾身の物語りに過ぎざれども、所詮人の命は此の物がたりの中に宿るものと知らば、はかなき事を繰り返すも、あはれ人間のやさしきところか。

曾遊首を回せば一塲の夢の中に、あはれなる運命を投げすてて、離歌一曲を二十一年の形見に、雲煙萬里の長路にのぼりし親友某氏の身の上、天涯地角、君果して何處の花月にか逍遙する、吾人は殊更に滄桑の嘆をなすものにあらざれども、十年の情交、顧念すれば豈多少の感慨なきを得むや、况むや昨年の今月今宵は、氏と共に痛飲曉霧を破りしをや。

人のてすさびか知られざれ共、過ぎし世の春のおもかげを其

歳に、幾年の形見心か昔な

去年今夜上高樓、
　盃酒慇懃賦壯遊、
　此夕樓頭人不到、
　　月明仍舊入離愁。

帝都の晩春、故山の秋暮、追懷すれば携手足跡、舊交の名殘また少なからず、扁舟の情、白雲の心、一度は曾て二人が觀念にさまよひしものなりき。

而して今奈何、吾は東都の風塵に埋もれて一事の爲すなく、氏は天涯に迷ふて足跡分明ならず、當年某校の三傑其一人は逝き、二人又東西を隔てゝ空しく殘影に對す、憶昔三春行樂の日、征鞍踏破る相州の春霞、一夜旅館の燈影昔をうつして意頗る切に、朧月滿庭春愁人にせまる、嘆息す人間多少のこと、語りて三更に至りて心の行方を追ふ、此の夜我れ吟ずれども氏舞はず、我は舞へども氏吟ぜず、一人常日に異なりて無限の感愴にうたるゝ者の如し、我肩をうちて何の故なるかを問ふ、氏さびしげに笑ふて答へず、我再び其故を問ふ、氏また答へず起つて詩集の中より梅花一輪を把出し、あゝ吾が今宵の心を知るものは唯これのみと、云ひをはりて更に何事

如今往事を思へば相州の征鞍また

をか思ふに似たり、吾れ梅花をとりて一見するに、いかなる人のてすさびか知られざれ共、過ぎし世の春のおもかげを其儘に、幾年の形見心か昔ながらの色ありけり。梅花に包む羽二重に、一首の歌あり。

夢となりしむかしの春のこゝろをは
おもかけにたに殘せうめか香

こゝに於て吾は氏か追懐の情人たるを知り、空しく燈影に坐して共に言なし。

春江の波濤なりて夢は萬里に逍遥ふが如く、一輪の殘香、果して何事をか語れる、吾は知る曾て氏が日記を披見せしをり『…………落る花に流るゝ水のあたゝかきシンパシーを味はむとや、戀しと思ひし初戀の君は、一と度は吾をなつかしと思ひしならめど、其人のまごゝろは、うたてや行く水にうつりし戀のおもかげに過ぎざりき、今にして其人のとを思へば、切なる心は昔にかへりて、はかなきとのみ思ひ出さる……』と記せることを、吾其の時その意を知らず此の時櫻花に對して、はじめて其意を知る、多少花月の情を知るもの豈風月の感なからむや。

如今往事を思へば相州の征鞍また一夢、共に桜を卒りて東西に別れ、三人徒らに薄倖の嗟を傳ふ、城北の校舍依然たるも交膝快談の名殘をたづぬるに由なし、氏の外なる一人の友は校を出てゝよりガンヂス河畔にいたり、大志未だ施すに期なく、ヒマラヤ山下、千秋の恨を殘して無爲に歸し、氏は去年十一月南洋に航して未だ歸り來らず、マツカリー丘上、菅沼貞風氏の殘魂を吊して以來、シドニーより一回の信書ありしのみ。

氏、我と別れむとするや、數十冊の日記を我に托し、且つ附して曰、君請ふ予が當年悲哀の跡を吊へと、吾は往事を追懐する毎に、氏が可憐なる心事を思はざるとなし、あゝ氏は確かに失戀の人なりき、然しながらこれ世上一般の失戀にあらず、吾は氏が秘密を世上の人に語らむと欲す、氏を誤解するなからむ爲めに、あゝ人若し左の断篇を一讀せば、誰か無限の感慨にうたれざらむ。

「あゝ○○子は曾て吾が唯一の戀人なりき、月にもあらず花にもあらで、しみ〴〵と物のあはれを知りしは、思へば○○子の昔にてありき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

往事花々一夢の如く、今は定まる良人ある身なれば、未來の妻として〇〇子は吾が觀念にあらざるも、初戀にそめしおもかげは、はかなかりし浮世の形見として、遂に吾が墓の中迄ものこさるべし、花こゝろあるも、春なさけなくむば、咲きもせず散り行きもせず、一生不運の死生をなさむのみ、あゝ人は吾が無妻論を難ずれ共、吾が何故に無妻主義となりしかを知らざるをうらむ、此の人こそはと思ひし〇〇子は、他なる人の妻となりし今、われは胸中最早『妻』てふ摸型を造る能はざるなり、只はかなき昔の面影を一生の友に、連理の情を知らで死せむのみ。

六年以前、はじめて彼を戀しと思ひ初めてより、六年後の今日此の頃まで……四季をり〳〵の吾が思ひの中に、むかしのおもかげのみ映つるぞ詮方なき、あゝ思へば明治二十三年の春雨、思ひをなやますの時、彼が戀人としての最後の文は、吾が一代の果敢なき形見として、つねに深く藏するところ、今や吾が心中には一片の慾心なし、たゞ彼をして一生の良友として樂しまむのみ、吾は眞の戀を知りしが故に、たとひ其人は他に良人をもたるゝと雖も、心中一片の殘怨なく、戀人一變して良友となり、行末の物がたりに、せめてものまごゝろを味ふを得ば、吾に於て何のうらみか之れあらむ。

吾が一生獨身のあはれを終りて、無窮の天地に眠るのとき、浮世の夢の跡なる墓の上に、彼れ若し秋夜一掬の涙を手向けくるれば、吾は微笑して天地に逍遙せむ。

さりながら果敢なかりしことを繰返へせば、昔より今のとに至るまで、つらきことのみ多き吾身かな。

思ふ人には　おもはれず
おもはぬ人に　思はるゝ

とは何人の述懐か知らねども、此の君ならではと思ひし人には、左ほど迄に思はれもせず、思ひもせぬ人には却つて深くおもはれし爲め、あはれの上にも哀を重ねしを悲しむ、吾にして〇〇子てふ昔の殘影なかりしならば、怎ぞ〇〇〇子をして無情なる死を遂げしめむや、又た彼の〇〇子爵の令孃をして、春花秋月、わが薄情をうらましめむや、とても角ても初戀に破れし身は、一生獨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

身にくらすより外なかるべし。
今や吾は昔日の事を一掃して〇〇子を保護するの位置に立てり、吾は〇〇子の親友ともなり〇兄ともならむ、心中一點の下等なる慾心は無けれども、せめてもの思ひ出には、六年悲哀の萬分一にても汲みとりて、〇〇子の心中に一片の悲哀を起さむことを欲す、吾は昔しの〇〇子を思ふ折は、心は茫々として追慕の情に堪えざれども、今の〇〇子を見る折は、心は死灰枯木の如く淡々として一物もなし、〇〇子若し吾が千萬無量の心を知らば、吾は今の御身を慕ふの權利なしと雖も、願くは六年以前の
御身を回想するを允せ。」
昔なつかしき梅花一輪のこゝろも、此の斷篇の中に匂ひて春やむかしの春ならねども、夢の名殘は追想の中に逍遙す、燃ゆるが如き感情を過去の名殘に委して、今より來らむとする幾春秋、滿目の風光果して奈何、あゝ花月を評論せしも一夢や少年行、携手探勝、足跡の塲、青山白流とこしへに依然たるも、天涯地角ところを異にして相思の感荐りに動く、今宵殘月に對して昔を憶へば、好個の美少年、滿春の花下に吟ふの珠玉、宛として眼前にあるが如し。
志のぶの浦、くらぶの山、花の匂をたづぬるを以て少年を責むる勿れ、由來戀愛は少年の命、若しそれ一片古今を貫くの操あらば、イトブルなる人と云ひて可なるを覺ふ。

橘の、香にせゝられて、
ねぬ夜かな。

昔を志のぶ花橘の由縁や、六年以來の心の行方、念じ來れば殘影我に親しむが如し、吾これを輙する豈たゞに友人某一人の爲めのみならむや。

行く秋のおもひ

哀蝶

一

行く秋の夕ばかり、蕭條として何となく、物の哀れ知らるゝ折はなからむ。日もやうく入りかゝるほど、讀みさせし書の卷を閉ぢ、何心なく眼を擧れば、隣家の園の竹にからむ蔦からしの今は力なげに葉をうなだるゝ、彼方の櫻の樹の、葉は此ごろの野嵐に振ひ落され、のこりすくなくなれるに、百

香鳥の何處より飛び來て、あやしく悲しげに鳴立つるかと思ふ間に、忙がはしく飛び去る羽風に、一葉は脆ろくも散りぞ、あるかなきかのかすかなる風に乗り、ひら／＼と落ち行くさまなど、我心はいつか身の内に沈みて、只寂然たる思のせらるゝもをかし。

二

雨降る日こそ、猶秋の姿著るく思ひ知らるれ。霏々として細雨遠景をとざし、常にはさわがしき鴉一羽、庭樹の間よりさし出たる丸木の竿の頭にとまり、けふのみは、いとゞ悄然と息らへる、見るさへものさびしさたへがたき心地ぞする。やがて鐘の音幽かに音づれ來て、くれ行く今日の夕を告ぐれば、翼重げに立ちて、今宵のねぐらの方にや、南をさしてものうげに飛び行くさま、かゝるむくつけき鳥も、さすが秋には漏れざりしよと、一しほ行く秋の懐はまさりぬ。

三

けふは空もうらゝかに、夕日の光りも清く、倒れかゝりし板垣におぼつかなくまつはる蔦蘿も、雁の音づれと共にくれなゐの色ぞまさり來ぬ。廣くもあらぬ我前栽をそゞろあるきすれば、まばらなる柴垣のひまより、隣家の少女の水汲む襟つけ紐のほの見ゆるもをかしく、やがて此方には只はでやかなる帯の後付のみ見せて家に入りしが、艶なる優しき聲と共にはほと笑ふざまさへもれ來るはいとゆかし。

四

このごろ我破屋の崩れし壁の間に、宿なし猫の、子幾匹か生み落しぬ。朝な夕な優さしき聲にて鳴き立つれば、親猫はこれに應へて、そのまわりを立去らず。日頃は人の影を見れば直ちに逃走るなるに、けふこのごろは、それには引き更へて、近づく人あれば、恐ろしく怒り猛りて、只管子を護るさま見ゆ、日々乳を吸はるゝにぞ、食を要するにも、求食るべき方も少なくてや、我室前をさまよひて、我面をかなしげに見ては、あはれに鳴きぬるさま、いとゞ胸迫るばかりなり。子の上いたく心にかゝるなるべし、遠くには出でゝ食を求めんともせねば、日をふるまゝに、痩せ衰へて其態いとゞ哀れなるに、心なき家人も、食膳の餘りなどを恵めば、喜ばしげに食ふさままた一層憐れむべし。あゝかゝることは必らず獸の上にもかぎらざらむ。人の秋はかゝる哀れを餘所に見るべきは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ど、楽しきもののみなるか。或日此の子猫をば、親猫の留守の間に弄あそびし童ありしに、其の夜、親は子を運び去りて何地にや行きけむ、跡もなかりき。さても秋ははかなき獣にもありけるにや。

五

東台の丘樹の間に友と袂を別ちて、小西湖畔に下れば、夕陽向ふが岡の茂林にかくれて、遠く東方の白雲を彩り、瘦風冷かに面を吹いて、敗荷のそよぎも哀れなり。池畔の廢柵に身を依せて秋景を貪ぼれば、心は只靜かに冴えにさえて、我あるを忘れ人あるをも忘れなむとす。此間の幽思寂想筆も及ばず、辯も盡さゝる所あるに似たり。見るともなく虚心に見眺る水面に波紋のあやしく織り出さるゝに、心はやうやく我に還りて、眸を凝らせば、一尾の緋鯉樂しげに、殘荷の間を潜りて悠遊するなり。彼は秋を知るか、彼は秋水の冷かなるをいかに感ずるか。我元より之れを知らず。志かれども人間以外又かゝる天地ありけるよと、獨り其の行衞を目守るうち、あやしき濁りをかき亂して、はては何地にや行きけむ。

六

夜落ちて月圓かなり、湖畔の酒樓の燈秋霧を漏れども、池面の景、東台の丘影只一面の輕羅をもて包まれたるがごとく朦くやたり。四顧人を見ず又車聲も聞へず。只浮寢の秋夢未だ成らず、雁一羽悲しき聲を立てゝ、幾度か池の面を周るにや、姿はかくれたれど、其羽音の寂しき空に冴え渡るは、いかに哀れ深き今宵の秋にやあるべき。

七

破廬壁崩れ障子破れ、夜寒むの風凌ぐに由なく、獨り別れて程經し友の文殻を函にさぐりて、短檠の元に讀みもて行けば、座ろに過ぎにし日のことなど思ひ出でられ、かくばかり情厚き人の、いかで今日までも、一度の音信だになくてあるにや。病にやなやむ。はた我を思ふの情失せ果しにやなど、さまざまに思ひ亂るゝに、今までは心にも止まらざりし殘蛩の音いと哀深く身にしみて、此方彼方、いとさびしげに鳴き連れ、はては我身のほとりに寄せ來るやうに思はるゝもかなし。

八

氷輪東空に高く澄み渡りて、杉の村木立を照し、殘光葉を漏れて影青く地に引き、行く人やう〳〵少なき丘の邊の小路を

たどるに、冷かなる風木梢に鳴り、さら〳〵と音して何の木の葉にやあるらむ、わが裾元に落止まるを、そのまゝかき捨てもせで、かへりてをかしきものと露多き枯草あるほとりに出れば、誰家ぞ、三絃の糸の音占床しく、静かに寂びたる空にかすかに通ふなど、いかなる人のすさびぞ、これも亦過ぎ行く秋の名残りの紀念かと、そゞろに心耳をすまして、立去りかねてしばし立ずみぬ。

九

きのふまでは、秋をばよそに咲き誇りにし庭の菊の花も、今朝よりの雨にはいたく色あせて、あさましげに散り行かんとすなり。明日よりは、悲しき蝶はいづくにか眠るべき。

孤兒ノ有樣

石田孫太郎

天下恐クハ孤兒ヨリモ憫レナルモノナク又孤兒ヨリモ親ヲ思フモノハアラザル可シ希クハ余ヲシテ多クノ孤兒ヲ代表シ以テ讀者ノ前ニ告ゲシメヨ

親ヲ失フテ知ル親ノ恩

吾年六歳未ダ父母ノ顔サヘ覺エザルニ既ニ母ハ死歿セリ然ルニ當時ハ甚シク悲シカラザリキ然レ𪜈父ハ再ビ妻ヲ娶ルヿヲ爲サヾリシヲ以テ余ハ外祖母ニ依リテ育テラレ漸ク長ズルニ及テ初メテ朋友ノ母ヲ呼ブヲ聞キ其母ヲ思ヒ出シテハ悲メリ而シテ父モ亦タ余ガ十八歳ノ時鬼籍ノ人トナレリ此ニ於テ余ハ悲ムヿ限ナク親ヲ思フノ心益増シ來リ或ハ深夜夢トナリ或ハ三更父ノ訓誡ヲ想起シ如斯モノ殆ンド數旬其想起セル言ニ左ノ如キモノ耳底ニ存シ居レリ

恥ヲ知ラザルモノハ恥ヂズ慈善ヲ行ハザル可カラズ人ノ此世ニ在ル勞セザル可カラズ而シテ勞二アリ一ハ身ヲ勞スルモノ一ツハ心ヲ勞スルモノ之ナリ汝何レヲ撰ブヤ必罫紙ニ字ヲ書ク可カラズト

之等ハ常ニ余ニ語リシモノナレ𪜈其父ノ生存スル間ハ左程感ゼズ或ハ之ニ背キシコト多カリキ然レ𪜈父一度鬼籍ニ錄セラルヽニ及ンデハ悔ヒタルガ如ク感ジ來レリ今ヤ只ダ其父ガ余ヲ訓ルノ懇ナリシヲ悟ルノミ又或日郊外ニ出ヅシニ數匹ノ蜂來テ余ガ眼ヲ刺シタリ直チニ父ハ己レガ衣ヲ脫シ之ヲ追拂ヒ余ガ眼ノ眩ミシ爲メ父ハ我ヲ脊負皈リ里餘ヲ走テ眼醫ニ診セシメシガ如キ或ハ余ガ大ニ鳥ヲ好ミ小鳥籠ヲ造ラントシテ成ラザルヲ見余ニ其一ヲ造リ與ヘ而シテ余ハ之ニ倣ヒテ造リ初メ學校ニ行ク前皈リシ後餘念ナク之ヲ造ルヲ見テ造リ終リシモノ造リ初メタルモノヲモ凡テ之ヲ燒棄テタルガ如キ親ガ子ヲ愛スルノ深キ親ガ子ヲ訓ユルノ厚キ吾レ父ヲ失ヒ後チ之ヲ造リタリ今ヤ其悟ルノ遲カリシヲ覺ユ

余ハ吾父ヲ失ヒタル當時ニ於テ左ノ如ク思ヘリ父ノ死セルハ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天壽ヲ完シタルニアラズシテ我父ノ敎訓ニ背キ心身ヲ勞セシメシガ故ナリト此ニ於テ又悲嘆交來リ終ニ余ヲシテ追善供養ハ無用ナリ宜シク社會ノ一方ニ立チ聊カナリトモ其靈ヲ慰メント決心セシメタリ又決心セザル可カラズ恰カモ艮シ同志社文學ハ靈不滅說ヲ報ジ來リ益其志ヲシテ堅固ナラシメタリ然リ之ヲ果スヤ否ヤ然レ𪜈親ノ恩ヲ知リ得タルニ於テハ惜カナリ之ト同時ニ增シ來リタルハ涙ナリ多クノ孤兒亦然ルナリ

孤兒ノ涙

孤兒ノ涙ハ永久乾カザルナリ彼等ハ親ナキモノヲ見テハ我身ヲ思ヒ或ハ不具者幼弱老衰者ガ食ヲ乞フ者ヲ見亦我身ヲ思ヒ一ツトシ同情ヲ表セザルコトナシ之レ多情多涙ノ仁人ニ依リ育テラレ其感化ヲ受ケタルニ依ナリ我等涙多カラズ又情少シト雖其親ヲ失ハザル當時ニ比スレバ大ニ差アルヲ信ズルニ至レリ

孤兒ノ涙ハ永久乾カザルナリ又乾ク可カラズ我等又孤兒ヲ育ツルノ義務アレバナリ嗚呼天下幾万ノ孤兒皆余ト異ナルコトナシ啻ニ異ナラザルノミナラズ未ダ乳房ヲ離ス能ハザルニ既ニ母ヲ失ヒタルモノアリ又無殘ニモ母ニ捨テラレタルモノアリ思ヒ來レバ余等程憫レニシテ多クノ仁人ヲシテ泣カシムルモノハアラザル可シ然レ𪜈神仁人ヲ我等ニ賜ヒテ我等ノ悲シキ涙ヲ拭ヒ之ニ代ユルニ深キ同情ノ涙トナシ賜フニ於テハ又喜ビノ極リナリ

嗚呼人ノ尊プ可ク重ズ可キハ親ヲ思フニアリ多情多涙ナルニアリ而シテ斯ノ親ヲ思フニ於テモ多情多涙ナルニ於テモ或ハ孤兒ノ專有タラントスルノ勢アリ之レ境遇ノ然ラシムル所ト雖𪜈又人類道德ノ頹廢ニ依ラズンバアラズ若夫余ノ言ヲシテ當ラズトスルモ余ハ右ノ事實ヲ演ジタルヲ如何セン又多クノ孤兒モ如斯ナルヲ如何セン天下ノ靑年令孃等一方ニ於テハ余等孤兒ヲ憫ミ一方ニ於テハ余ガ言ニ依リ益親ニ孝又多情多涙ナレ之レ余ガ悔悟ノ意ヲ表スルト同時ニ親ノ恩ノ大ナルヲ現シ併セテ孤兒ヲ代表シ仁人志士ニ告白スル所ノ者ナリ希クハ諸兄諸姉ヨ余ガ言ノ凡ラヲシテ決シテ余等ノ專有タラシムルナカレ又余ヲシテ親ヲ失フテ知ル親ノ恩ナル語ヲ取消サシメヨ之レ余等カ希望ニ堪エザル所ナリ之レ余等ガ希望ニ堪エザル所ナリ

暗夢

花　里

幽なる山中に彼の君と手をとりて。いよ〱靜けき奥にとたどるに。前には大蛇うね〱と横はり。後には恐ろしき狠の吾等にかみつかんとす。いかにせんと考ふ暇もあらばこそ。傍の森林にかけ入りぬ。手も足もあけにそみ。衣は裂て一房を爲し辛くもこゝにたすかりて。劍を立つるが如き細道を。たどり〱てのぼり行く。一歩あやまちては千尋の底の鬼となるべき。はかなき運命に二人はたすけあひ。樹にすがり蔓を引きて。今や頂上にと思ふとき。いづ地よりならん。声きりに。われをよぶ人あり。傍を見ればいぶかしや。夜來の暗夢にてありけり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

浦の志ほ貝

白　衣

冬

樹頭に花の艶無しと雖ども
新芽包まれて殼中に在り
梢上に葉衣剝がれつれども
細枝集て嬉々相睦まし
こゝに情意を偏するの色なく
かしこに視線を遮るの塊無し
縷綃たる妖姿飾らずと雖ども
又是蕭洒清ふして塵なし
霜落ちて白衣淡く装ほひ
雪降て六花輕く舞ふ
冬夜最も人の讀書に適し
冬日最も人の健康に協ふ
月澄んで樹林暗影なく
風烈にして能く我眠を覺す
晴天の散策氣を郊外に放てば
身輕くして萬里眼界遙たり

花下の旅客

花をあるじの木かげの夢も
　あしたの露に目さめて見れば
かたしく袖に鬼あざみ
　春はあらしに散りにけり

なさけ

むかしながらの　やまざくら
いさもむかしの　まゝながら
ものおもふみの　なさけにぞ
志がのみやこは　あれにける

牡丹花

牡丹の花．牡丹の花
艶冶の風姿　濃彩　輝く
露宿て　芳肌　眞珠飾り
風戯て　玉辱　漣漪動く
粋弱ふして　細腰　折れなんを疑ひ
葉重ふして　綵羅　衣きるに懶うし
黄金　蕋甘ふして　狂蝶　酔ひ
紅玉　房暖ふして　蜂児　睡る
夜月窺て　多情　面を羞ぢ
朝暾耀て　媚嬌　艶を凝す
頸を低れては　怨姿　斷腸の思
項を伸べては　笑容　嫵媚生ず
王公紳士　細馬　遊び
公主令孃　軟轝　來る
富貴の國色　萬花朧に
豪華比無く　寵餘あり
悲むべし　花大にして身堪らへず
雨降て　一朝　泥土に委す

口ずさみ

このこゝろ　たれにかたらん
　ものいへば
かぜに　さくらの
　はなや　ちるらん

無常

よどみに浮ぶ　うたかたの
　哀れを　うたふを勿れ
人の心の　ちら露は
　念々刹那に　きえ結ぶ
絶へぬ流の　水もせに
　かなしき聲を　もらさゞれ
人のなさけの　面かげは
　もとの姿の　あともなし
かへり見すれば　月落ちて
　東の方は　あけそめぬ
あくる間おそき　夕ぐれや
　夕ぎりこめて　世はくらし
心のやみの　はれくもり
　曇りては々ゝ　夏の空
夕立すさぶ　跡きけば
　池の蛙の　聲すゞし
むかしの我は　我ならず
　あすの我身や　いかならん
すぎこし方は　消えゆきて
　來日　いまだ知るべからず
いかんぞ　蜉蝣の身
何のたのみを　頼みにて
　遠の途を　ながむらん

風にこずえの　靜まらで
　霜には　おつる木の葉かな
われに　操の守られで
　人また　我を捨去りぬ
永久ののぞみ　空しくて
　輾轉のおもひ　止むまなし
日は朝ごとに　いづれども
　あやなくかくす　墨の雲
月の光は　きよけれど
　充ちては缺くる　習なり
無常を　常さとされて
　無常の風の　きえはせず
きえぬ無常の　常ならば
　常さふものも　常ならず
人身うけ難しさは　いふものゝ
　ほさけの法も　いかゞせん
こらへぬ　花の行末は
　いかなる根にか　歸るらん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

元來し道の　古里ならば
　すゝむ彼方は　いづこぞも
生れぬさきの　身を知れば
　死なん命の　はてもなく
なかぬ　鳥の聲きけど
　人のなみだを　いかに見ん

あした夕べの　宿りさへ
　定めかぬるか　人の身の
露の白たま　手にうけて
　糸にもぬかん　すべもがな
惡むもの丶　さいはひならば
　なぐさめさふは　涙かも
神の御かほは　はる雨に
　ぬれて色なき　綠葉か
冬なる雪は　大神の
　頭をそむる　色やらん
花のかんばせ　移りゆく
　流によする　年の波
若きも老も　同じ瀨に
　さわぐ心は　ふら波の
形は見れど　手にはさらで
　聲はきけども　其（それ）さしもなし

うなゐ子ども　弄そぶ
　遊びの品の　いろ〳〵に
かなた此方の　心こそ
　かはる情の　姿なれ
梅の花がさ　かざせども
　櫻のさけば　早くちり
むらさき深き　ふじの花
　ふだれの糸の　賴まれず
夏は　木かげの休らひに
　春をわするゝ　人心
秋の紅葉の　くれなゐに
　綠をおもふ　ものもなく
霜ふる　夜半の寒さには
　いたづらにのみ　かこちつゝ
岩間をすべる　谷水も
　たぎれば　すごき瀧の音
雪をさばせど　過まけば
　あゐ色　黑く沈むなり
淀めば　ゆるく休めども
　淺瀨にみだる　あだし波
富士のみ山の　煙だに
　つひに　えたゝずなりぬれば
焦るゝ　むれの思さへ
　よすべき方の　今はなし

行衛や　いづち　やるせなき
　思にくるふ　物ぐるひ
みだれ心を　わらはん人の
　こゝろこそ　猶みだれけれ
覺るさいふも　迷なれば
　迷ふまよひも　何ならず
惡魔も　すめば　神も　ます
　何れを分かぬ　二はしら
あくまが　我を惑はさば
　神は　我をや欺かん
萬法一如さ　きくからに
　差別の波の　あれぞ立つ
浮べる雲の　たえざれは
　天も　拭ふに力なく
うづまぬ底も　あらざれば
　海も　たゝゆる　たより無し
あしたを賴む　あだ櫻
　嵐を　うらむよしもなく
まねぐ尾花の　性（さが）ならば
　弱しさ　いかにさがめまし
きのふの　色のかゞやきは
　あせにし　今日の夢なれや
ふづけく見ゆる　鴨の身も
　見えぬあがきに　暇ぞなき
哀れにひゞく　山びこは
　我が呼こえの　幻か
强けく見ゆる　もの丶ふも
　越山の月に　ふばたゝく
くろがねなせる　岩の上に
　咲きも匂ふか
　　白百合の花

出船

花影子

港のくちの燈臺に、　火かげほのめくたそがれに、
烟をくがにのこしおき、いでゆく船を見おくりて、
　　なほもたゝづむ人多し。

いまいでゆきしあの船の、乘手はいさも多かれど、
親や妻子をあさにして、たびたつ人か故さとの、
夢はいくごもはや見じさ、いさみてかへる人ならむ。
故鄕たちてゆく人は、　いふもさらなり朝ゆふに、
まちに待ち居し故さとへ、かへる人さへ見送れば、
　　淚にたへぬものなるに、

浮世のみなさ立いでゝ、ふたゝびかへるすべもなき、
さこ世の國へわが友は、ひさりいそぎてかへりけり。
親はらからを遺しおき、ふたゝびかへるすべもなき、
みなさをいでゝ行さきに、たさひさきのみ急ぎても、
名殘りおしまぬ人やある。
名殘はふかくおしみても、港をいづるさきをのみ、
待ちにまち居しわが友の、心のうちぞふのばるゝ、
あゝわが友のまちにまち、ゆきにし國は人みなの、
　　故ささなりさわれはきく。
われもつひにはかの國へ、かへるさかれて知居れど、
いまも名殘はうすからず、たびだつ人の思より、
のころはつらき者なれや。

片々

○ことしの地久節

三日の後に迎え祝ふべきは、ことしの地久節こそ、吾等が取分けて賀し奉つるべき聖日なれ。何れの年を之と分つべきにはあられど、大元帥陛下、全世界を聳動せしめたる捷を得させて、恙なく還御ましまし、皇后陛下御內助の効一入に顯明し、御目出度御間柄の一ときは赫々たる今年の此の祝の日に於ては、吾等は抑も何の言葉を以て奉賀し參らすべき。請ふ共に、赤心衷情の眞のいはひを捧げん。

○帝國教育大會

西京に於ける同大會が、女子教育部に定めたる議案は、左の如し、

第一　高等女學校に於ては自活的技能を授くるを主とすへきか將た內助的婦人を養成するを主とすへきか

第二　女子の躰育は如何なる方法に依るを以て最適當なりとするか

第三　女生躰操科受持は男教員女教員何れを適當とすへきか

第四　高等女學校に於て漢文を併せて課すると課せさるとは讀書力及作文力を養ふに差異なきか如何

第五　高等女學校に於て漢文科を置くときは第何年級より課するを適當とするや

○同志女子教育會

關東關西の同志女子教育者及び女學校は、來る二十七八の兩日、西京に於て大會を開始せんとす。

○今後の警戒

今後の警戒として、識者が注目する所ろ、殆んど同一轍、曰く、淫風を防ぎ、公娼を止めよと。西京の婦人矯正會、及び靑年矯風團躰は、之が爲めに小册子「警鐘」を印刷し、廣く數万部を配布せんとす。在米の城常太郞氏、亦た戰役の日本矯風論一册を著はし、大要、先づ廢娼より初めざる可らざるを痛論せり。衛生雜誌も亦た叫んで曰く、私窩子を掃蕩せよと。

○神代の女性の爭論

外山、井上の兩博士、いよ〳〵論爭して、いよ〳〵傍岐に入る。然れども、爭ふ所ろは、神代の女權論に關するものなり。

○幼兒教育の調査

女子高等師範學校附屬幼稚園の成積報告なるもの、公けにせらる。中に就て、尤とも注意すべきものを左に引抄す、

(一)　幼兒教育上に就ての心得

一賞罰を明にす可き事　一一旦命せし事は之を取消すべからさる事　一實行し諭き賞罰を施すべからざる事　一約束を確守すべき事　一猥に教ふべからざること　一決して欺く可からさる事　一幼兒の好惡に注意して之を正す可き事　一父母長上を尊敬し其教に順はしむ可き事　一父母の恩を感佩せしむ可き事　一朋友兄弟和合の樂を得せしむべき事　一恐怖の情を興へ奇怪の念を起さしむ可からざる事　一我意を張らしむ可からざる事　一惡習慣を抑へ良習慣を長せしむべき事　一相應の艱苦に慣れしむ可き事　一己の欲する所を他に施さしむべき事　一他を誹り又其非を擧けしむ可からさる事　一嫉妬の念を起さしむ可からさる事　一剛愎卑劣ならしむ可からさること　一活潑にして獨立心を養はしむ可き事　一自慢の氣を生ぜしむ可からざる事　一徒に衣服等に心を留めしむ可からざること　一冗辯を戒め必要なる言は臆せすして發せしむべき事　一事を行ふに順序を以てせしむ可き事　一事を敏捷になさしむ可き事　一自己の本意に由りて事をなさしむべき事　一臨機の才を養はしむ可き事

(二)　幼兒衛生上に就ての心得

一諸病症の前兆　一發病後の手當　一乳の事　一食物の事附間食の事　一齒牙の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

事附口中清潔の事　一衣服の事　一清潔の事　一換氣法の事附部屋の事　一沐浴の事　一運動の事附遊戯の事　一睡眠の事　一姿勢の事　一種痘の事　一藥餌の事　一耳目保護の事　一手指運動の事　一發音の事

（三）幼兒保育の細目

幼兒教養上躰育を先きにすべきは當然のことなれとも當分室の幼兒は身躰の發育十分なりと云ふ可からざるも平素の習慣より寒暑に侵さるゝ等却て少く唯皮膚病に罹るものあるのみ故に教養上殊に德育を重んじ相當の智識を啓き又徐々に小學校に移るの準備を爲さしむ即ち勉めて躾方に注意して整頓清潔規律を貴び正直にして忍耐勉强の良習を養はんことを主として左の細目を定む

說話　幼兒の日常心得べき事に付訓誨を加へ又自ら見聞せし事實を語らしめ時々適切なる實事寓言及庶物等の話を授く

行儀　別に時を定めず常に注意して言語動作を矯正す

積木　各兒に相應して正方躰長方躰三角檮等を與へて多くは隨意に工夫せしめ時に教へ授くることあり

排板　彩色せる正方形又諸種の三角形の板を與ふ其方法積木に同じ

畫方　石盤上に自由に畫かしめ又實物を示して之を觀察せしめ簡易なる外形を畫かしむ稀には齊對形を教へて畫かしむることあり

摺紙　難易の順序を逐ひて之を教へ再三反覆して摺方を記臆せしめ美麗式に屬するものは成るべく自ら工夫してなさしむ

繋方　當初は麥藁と紙とを與へて之を余に繋くことを習はしめ漸く進みて色の配合に注意せしむ又南京玉を與ふることあり

麥藁細工　麥藁を屈曲して種々の形を作らしむ

豆細工　幼兒の工夫に任し時々教へて諸種の形躰を造らしむ唱歌常に樂器を用ゐず單に口頭を以て普通の唱歌を授け發音及び音律を矯正す本邦の旋律に關するものは自然に幼兒に適し唄ひ易く且進行緩なるを以て自ら心神を和げ靜肅ならしむるが故に多く之を撰ふ

遊戯　規律あるものと然らざるものとの二種を課す規律あるものは唱歌に從ひて運動し或は其方法一定せるものにして規律なきものは即ち自由遊にして多くは戸外に於てす

讀書き　讀書は保育課目外に屬すれとも凡そ學齡に近つくに及ひて小學校に移るべき準備として石盤を用ゐて片假名を授け讀書を受くるの精神を造るを以て目的として書方讀方を教ふ

（四）幼兒保育の方法

當分室の幼兒は前既に記するが如く一般に生活の度低くして其父兄たるもの多くは子を教ふるの道を知らず唯猥りに之を愛して訓誡を加へず賞罰常ならず規律定らざるを以て其威嚴は行はれず徒に兒等の我儘を增長せしめ又之を矯正するの術を知らず放ちて路傍に遊ばしめ惡行至らざるなく遂には理非を辨ずる能はざるに至らしむるものあり兒女入園の當初に在りて已に惡風に染み惡行に慣れたるもの多ければ之が取扱上稍嚴格ならざるを得ざるなり故に專ら此邊に注意して徐々に之を矯正し教訓を加ふることを勉め一事より始めて漸く全躰に良習を得しめ終に離る可らさる一個の氣風をも造らんことを期す因て每朝兒等の躰容に注意し衣服を整へ顏面手足等を潔くし然る後必す修身行儀等に關する說話をなし其間は一層姿勢に注意し專ら怠慢の風を避けしむ

隨意遊戯は最も價値あるものにして幼兒の心性を觀察し家庭の狀况を知り得るを以て成るべく干涉せずして充分に之を爲さしめ其間は主として各兒の自治に任し朋友の制裁を貴び且つ長は幼を愛し幼は長に從ひ秩序整然として情意自ら和し規律嚴然として行動稍々正しく眞に人間社會理想の樂境たるの思をなし且つ勤勉忍耐以て此樂園に到達せんとの氣を起さしめんとす

手技は幼兒に年齡の長幼あり心躰智能發達の差異あり又入園の前後もあれば凡そ二部に分ち各部適宜の業を課し時には室に內外に別つことあり即ち一は內にありて手技をなし又一は外に出でゝ隨意遊嬉を爲さしむる等是なり

前既に述るが如く管理の方法稍嚴格なるは止を得ざることなれとも幼兒の年齡に應して多少其度を異にするは固より當然のことなりとす

◉**婦人勞働論**　と題して信濃每日新聞は論すらく（五月十二日）、男子固より働くべし、女子豈に男子の臑をかぢるを以て能事とすべけん。婦人諸君、もし男子に器械視せらるゝ現在の境涯を不愉快とせば、乞ふ職を擇んで自ら勞働せよと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉朝鮮婦人の日本留學　は之を以て嚆矢とす。即はち、京城の前監察何河相驥氏は、夫人金蘭と共に來朝し、現に朝鮮公使館にあつて、日本語を學びつゝあり。追ては、夫婦相分れ各自別途に大に修學すべき計畫のよし。

◉戰捷地の女風　讀賣新聞は五月十五日の紙上に、遼島半島の婦人の風俗を記載し、國民新聞は同日の紙上に、澎湖島の婦人及婚姻の狀態を記載す。曰く、婦人は、其の足を夫の外には見せず、靴は尤とも珍重して死すれば棺に藏め若くは情人に贈呈すと。

◉横濱の闇夜　と題して、天仙子が五月二日の毎日新聞紙上に慷慨する所ろによれば、根岸村の谷深き邊り、ラシヤメン町の不潔なる名を冒す家々に、一度び女學校の生徒たりしものが墜落せるもの多くありと。痛恨何ぞ堪へん。

◉日本婦人服　英米交際社會に大いに流行せんとす。三月九日のコート、ジョウナルは、英國女王陛下宮殿の應接間に於けるウーレー夫人が華美なる日本服裝の摸樣を記して、太たく珍重せり。

◉晉國の婦人　は喫煙を好み、公けの制裁も亦た緩るみ行しにや、近年其の內務大臣は全國の鐵道役員に訓令し、自今列車中には喫烟自由の婦人室を備付くべしと命下たり。

◉米國女子高等教育の進步　米國女子の高等教育を受くる者の增加する割合は實に著るしきものにして近來女子の中學に入り大學に移るもの ゝ頗る多く從つて女子にして醫師或は教師となる者非常の速度を以て增加し殊に教師に女子を增加せしは最も著く今を距る五年前即ち千八百九十年には合衆國全國に於て男教師十二万五千五百十五人に對する女教師の數は二十三万八千三百九十七人なりしが其後二年を經たるに男教師は三千九百七十四人を減少し女教師は一万四千三百八十三人を增加せり斯る傾向を以て進まば教師と云へる藝業は全く女子に占領さるゝに至るべき事明かなり現時に於てすら女子が教師として用ひらるゝは決して小學校に限るにあらず中學校師範學校はいふまでもなく大學の教師たる者亦甚だ多し以て米國に於ける女子教師の進步せる一斑を知るに足るべしと同國より或方への通報に見ゆ（五月十二日東京朝日）

◉山口縣熊久郡八代村　の婦人教會は去二日六週年大會を開き、彌よ隆盛なり。地方の婦人會にして現に盛なるものあるは可賀。

◉峽中の女子教育　大に振起せしめざる可らずと、同日報は去八日の紙上に痛言せり。

◉福澤先生の古物展覽　五月五日慶應義塾同窓會に就て、同塾開業初代の古物を展覽に供し、現時の少年を驚ろかす。中に、天明版節用字引あり、其辭に云く、之は福澤先生の夫人が嫁入りの時、持參の品にして先生は毎度之を用ひて著書飜譯を爲したる由、今は早や表紙も手擦れ、綴線も綏み居れりと。又先生が著書一覽表中、殊に女學に關するものは、

　かたわ娘　男女交際論　暢合の法

◉織舟居士の二令孃　大子、松子の君、去る程、小松若宮殿下御息所、八重子の方の御前に於て仕合を爲しける時、雌雄久しく决せず、龍虎雲に爭ふの態ありしが、松子の薙刀、中央よりポッキと折れ、勝負は預かりとなりしよし。

◉西京に於ける老監督ウイリアム　の近狀を報ずる人の書中に云く、京都へ來られし以來、菅氏方に御滯在、衣類を除き食住は全く日本風、洋食にあらざれば御身躰の爲に惡しかるべしと心得られ御勸め申ても御聞入なく、不得已、日本食風にて充分肉類を差上候へば是は御意に適せず、家族と同一に味噌汁に積物にて賄ひくれよとの御懇望のよし云々。

◉女子講義會　なるもの起り、講義錄を出版せんとする人あり。講義錄の流行は女學界にも波及せんとすらん。

◉東京女學生　の近狀を視察したる報告なりとて、山形自由新聞紙上に、華山生なる人の記載するものを見るに、云へらく、學校の規則嚴重なると社會の制裁の進步したるとは、相待て女學の恐慌を斷てり、地方の父兄其令孃妹子を東京に留學せしむるに大なる危險なかるべし。又云へらく、女學生の生意氣は內行せり、是れ女學生の一進步と云ふべしと。

◉馬關毎日新聞の云ふ　當地西の端町教法寺の多田道然氏はこれ迄三教會を起して宗教上の爲め而已ならず婦女子として必要なる裁縫並に縫附の科目迄も設け教育の一端を補ひ居られしが氏は宗教を盛大ならしめんと欲すれば勢ひ蓄財の方法を講ぜしめざる可らずとなし昨年來各地を巡視して婦女子に一種の技藝を授けたしとて奔走せられし結果佐賀市に設立の實業補習學校にて美術縫を視察して大に感を起し終に今回同校の女教師一人を聘し以て志願の人に美術縫

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を教授せしむることなしたり。

◎大阪人の結婚年齢　昨年中同府下現住の者に就き調査せし結果は九千九百六十夫婦にして其内最も早婚の者を擧ぐれば女は十三年の者十八人、十四年の者二十七人、十五年の者に至りては百〇五人あり又男にして最も早きは十五年にして九人、十六年は二十人、十七年は四十八人、十九年は百六十一人なりと云ふ（大阪毎日新聞）

◎海軍々人婦人會　鮫島少將夫人には海軍々人婦人仲間に於て互に交親を結ぶの方法なきを慨し此頃題目の如き一會を組織し築地水交社に於て毎月朔日を定め互に會合して親睦を結ばんと發意したりしを西郷大將令夫人を始め其他の高等武官夫人大に賛同したる由なれば遠からず同會の成立を見るに至るべしとなり。

◎異例新婚者　として開花新聞が熊本縣下一昨年中の事實を摘示するものを見れば、

嫁を娶りし分

男、十八歳……………………女、四十歳（一組）
男、十九歳……………………女、四十五歳（一組）
男、三十歳……………………女、五十九歳（一組）

婿を取りし分

女、十二歳……………………男、二十歳（一組）
女、十七歳……………………男、四十歳（九組）
女、廿五歳……………………男、六十五歳（一組）

早婚者

男、十三歳……………………女、十三歳（一組）
男、十四歳……………………女、十四歳（二組）

◎女學子の新領地開發意見　は論ずらく我婦人外人に嫁すれば其家庭を我國風と爲し兒孫をして其感化を受しむ之に反して邦人外國婦人を娶れば自から其家庭を洋化せしむ故に我新領地を開かんとせば宜しく我婦人をして多く新領地内の清人に嫁せしむべし彼等をして日本化せしむるを得べしと蓋し適論なるが如し（北國新聞）

◎男女身體比較　明治生命保險株式會社被保人中、健康體の男女一万有餘の平均表左の如し、同社診査醫長印東玄得氏の調査に係る、

	男子二万人の平均	女子二千人の平均
身長	五尺二寸	四尺八寸二分
體重	十四貫〇六十七匁	十二貫三百四匁
胸廓の周圍	二尺七寸八分	二尺六寸七分
胸廓の前後徑	六寸二分	五寸九分
胸廓の横徑	八寸三分	七寸九分
活量	三千〇十二立方仙迷	三千二百八十四立方仙迷
呼吸の數（一分時間）	十九	二十
脈搏の數（一分時間）	七十四	七十七
腹圍	二尺四寸一分	二尺三寸二分

一被保中年齢十五より六十歳に至る健康體の男女子の體格を調査したる者なり
一健康體とは醫師診察上に於て體格の薄弱固疾輕症其他苟くも疾病と認むべきもの又は遺傳素因割增等あるものを除き單純なるもの丶みを撰拔したるものなり
一活量は立方仙迷を以て一位とす

◎櫻井ちか女史　最後の訪問を爲せし云々「ユニオン、シグナル」雜誌三月廿八日發行の分に見ゆ。

◎天足會　支那婦人が足を縮小するの弊風を廢止せしめんとして、近頃ろ上海にある宣教師夫人等の盡力にて題名の會起り、ドラモンド夫人會長となる。自今每月一回雜誌を發行し廣く配布す。又た、縮足の如何にして起りしかの由緣並に矯正策に關して懸賞文を募れり。上海病院のドクトル、ロウエル氏曰く、支那少女十人の一人は、其足を縮小するがために斃死すと。

◎シャーランド夫人逝けり　横濱山手の共立女學校に、長州長府の女學校に、音樂の教授尤とも堪能なる名に於て久しく聞こえしシャーランド夫人は逝けり。

◎墺公使伯爵法學士　ヘンリー、グーデンホーフ氏は、雲照大和上の說法を聞きて、遊獵を止めたり。

◎成美婦人會　京都私立女學校内に於て、去月二日に創立せらる。

◎婦人大祈禱會　關東關西同日に開かれたる同會のことしの景況は取りわけて盛なりし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉所謂家事と云ふ科目につきて　古の婦人別に所謂家事なる學科を修めず、然れども圓滿能く治り、家政能く擧がる、今の婦人は家庭理財を學ひ、育兒法料理法などを讀んず、然れども是等のとを讀んずる人に限りて、兒を生めば則ち之を乳母に托して顧みず、料理は料理屋仕出し店に命じ自ら料理法を實行する必要なし。加之理財の途頗る拙なく、家に幾何の收入あるも、借金身に添ひて離れざるもの甚多し、畢竟家事の如きは、テーブル上に之を教へ、之を習ひ得べきものにあらず、寄宿舍ある學校にては、生徒をして交る〳〵寄宿舍の家政を執らしむるもよからん、然らずんば、常に生徒の父母たるものに注意して、家庭にありて家事の實習を怠らしめずんば可なり。果して此の如くなるを得ば、家事を講習せるもの、却て家事に拙なりとの譏は、自然に之を免るゝとを得ん（教育時論）

◉藤本善治氏と朝鮮の儒教　と題する「八紘」の一論説は、「太陽」に掲げたる朝鮮人儒教に拘泥する所ろ寧ろ善用すべしとの論議を非とする也。願はくは、該記者に、朝鮮人德育の方案を聞くとを得ん。

◉女教師の得失　として兵庫縣教育雜誌が、列擧對觀する所ろ、左の如し、

女教師の害

一。女子は一般に管理の才に乏し、故に餘程熟練なるものに非されは五十人六十人の生徒を監督整理するとを能はす。

二。女子は愛嬌多き者なれども、生徒に對する有樣を見れは、概して男子の方愛嬌に富めるか如し、是れ管理の爲めに、汲々全力を盡すか故に愛を賢るの閑地を存せさる爲か、要するに兒童に取りては、女子の摯情にして齷齪たるよりも、男子の無頓着なるを喜ぶなるべし。

三。尋常科三年以上の生徒は、概して女教師に心服せす、是れ固より、惡しきとなれども、今日の習慣一朝にして除くへからず。

四。女子は受持生徒教授の外、一部の事務を分擔せしむるに適せす、故に何事か多忙にして、職員一同汗を流して奔走する場合にも、女教師は袖手傍觀するか如きと間々あり。

五。女教師と男教師との間、互に心腹を吐露して、隔意なく、圓滑ならしむるとを求むるは、現今の有樣に於ては、到底見るへからす、故に職員の間柄は、碌々として瓦石の聚合せるか如く、隨て校内諸般の改良進歩の勢を阻格するとも少からす。

六。女子成年に至れば、他に身を托し、分娩の爲めには數十日間缺勤せさるを得す。

七。女子は家政の責任あり、故に奮勵勇進して、一意校事を其身に任する能はす。

八。生徒の摸範は教師なり、生徒の氣質にして、能く教師の眞を摸し得たる時は、教育の實効の奏せられたる時なり、噫安そ日本二代の國民をして、かゝる婦人の手に托し、成長の後かゝる婦人の如き民たらしむるに忍びんや。以上は女教師に附帶する弊害の太略を列記したるにあり、而して又其利益のある所を擧くれば左の如し。

女教師の利益

一。女教師は身體の强壯なるとは、男教師に及はすと雖も、下級の男生徒、又は上級の女生徒を教授するに、何の難きとかあらん、慈愛溫和の特性を以て之を導かは、女生徒は勿論、幼稚なる男生徒も、自ら粗暴の風を去り、順良の基を啓くとを得へし。

二。推理果斷決行等の諸心力は。男子に及はすと雖も、愛憐注意觀察等の諸心力は、却て男子に優る所あり。隨て女教師は客觀的の教授に適當なり。

三。女子は注意力觀察力等に富めるを以て、男教師に比すれば、萬事整頓するを見る。

四。生徒の動もすれば、女教師を輕侮するの弊あるは、之れ其學力未た男子に及はさる所あればなり。女教師男教師同等の學力を有する時は、生徒は却て女教師に服從するに至るへし。

五。愛憐は女子の特性なれは、生徒の看護及昇降校の仕度等に際しては、注意最も厚し、又唱歌は女子に適當するものなれは、生徒遊戲の際に於て、且つ歌ひ且つ遊はしむる等の方法による時は、一層の興味を添ふるとを多し。

六。女教師を用ふるときは、裁縫專門の教師を省き得るを以て、費用節減に益あり。

◉國力と女子教育との關係　細川潤次郞氏、此度の事件に感する所ありて、始めて廣く海外諸國の女子の關係を通覽調査したるに、女子教育の隆んなる國は、即はち國力强しとの事實を發見せりと演述せらる。

◉文學者の國門　に關して去五日のやまと新聞は一覽表を記載せり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

嶄新看護學書發刊廣告

獨逸ドクトル、ビルロート原著
日本醫學博士、北里柴三郎先生序
日本ドクトル、佐伯理一郎譯補
（總紙數凡四百餘頁 挿圖凡六十個）

普通看病學

全二冊 卷一 正價金卅五錢郵稅金四錢 卷二 續出

そも婦人の學ぶへき道に就きて看病學の大切なる事は昨年來の日清戰爭により普く世の人の知るところなりぬまた婦人諸姉に於ても少くともその一をはしらて叶ひ置くべきの學術なる事を知り給ひぬさるにても是まで我が邦に於て出版せられたる看病學の書その數多からぬのみならで充分にその意を述べその味を含めるの書なかりしはまことに斷念のため惜むべきの事なりきこゝに獨乙國にて名高なる外科の大家「ビルロート」氏の著せる普通看病學なるものありこは「ビルロート」氏のいとも深き學識と博き實驗とより得たる著述にしてその親切叮嚀なるを我國に於てすら之にまさるもののなきはこの良書なれば此度斯學に經驗多きドクトル佐伯理一郎氏に乞ひ之を譯して世の需めに應ずる事となりぬさて之を譯するにはつめて簡明なるを旨と用ゐ且つ我邦の風俗と習慣に照し合はせたれば世にありふれたる飜譯書にすぐれてめでたきものなりされば世のこの業を勸むる人さこゝろにかゝらざる人こを問はず之を購ひ給ひて國に事ありて人に急ある時はその學ふところによりて世のため人のために盡しまた常には之によりて一家の災害を救ひその健康を護り給はゝこのやがて世に出したるの勞もまた酬ひられたるものと云はめ

獨逸ドクトル、リューレマン著
日本ドクトル、佐伯理一郎譯補
（印刷鮮明 紙質頁好）

平時 戰時 救急看護法 全

正價金卅五錢
郵稅金二錢
挿圖百卅七個
懷中手帖形

此書は獨逸國陸軍一等軍醫ドクトル、リューレマン氏の原著にして戰時及平時の[illegible]急看護の事に就て病人運搬法を始めとし[illegible]を[illegible]げ[illegible]看病の法及び[illegible]人の[illegible]も[illegible]にしてこ[illegible]たびに[illegible]知り給はざるべからず[illegible]其[illegible]の[illegible]ら[illegible]し[illegible]今や已に[illegible]の出版[illegible]る[illegible]べし[illegible]世[illegible]看病人[illegible]中[illegible]數[illegible]及[illegible]衞生の事業に[illegible]熟[illegible]人々は各[illegible]

東京本鄉區[illegible]町[illegible]番地 吐鳳堂
東京日本橋區馬喰町二丁目 英蘭堂

切拔通信の要旨

●全國の新聞紙無慮百數十種日々掲載する所の事項千差萬別世人の必す知らさるへからさるもの擧て數ふへからす然れども全國の新聞紙を一集して盡く之を各自に通讀せんことは人事の繁多なる今日に在て容易に爲し得へきにあらす是本社の嘗て新聞切拔通信の業を創始し以て渇汇必須の需めに應せんと欲する所以なり

●切拔通信をなすへき題目は農工商業政治法律外交貿易政黨俱樂部敎育宗敎歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまて其委托に應し精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にし以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區釆女町廿壹番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

切拔手數料大要

●一已の身上に止まる通信は壹ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一會社一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五十錢まで●一會社又は一團體の全般に關する通信は壹ヶ月金五十錢より金壹圓まて●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約と爲すことあるべし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は拾件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外とし件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

●婦人科小兒科專門●
赤坂丹後町[illegible]角
女醫 大村のぶ子

婦女學院製品大販賣
[illegible]芝區[illegible]町七番地
鈴木庄三郎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

山縣伯、大山伯題辭、勝伯題詩、三上參次君閲、泰東勝田孫彌君著

西郷隆盛傳

全五冊 完成　○各卷再版出來○

特價一冊金三拾錢　全部金壹圓卅五錢

郵稅一冊六錢 全部二十錢　切手一割增

○本書に挿入せるものは隆盛の肖像、隆盛眞筆の書翰三通、律詩一篇及び地圖二葉

本書は著者が二十三年春以來熱心に調査して著せる**蓋世の英雄、維新回天の元動力なる隆盛の詳傳**にして本書の出るや各新聞は**記事正確、叙論公平、近來の好著述**と評し又大に**世の稱贊**を得たり今批評の二三を左に抄錄す

●日本新聞 維新の洪業に大關係あるもの三人あり西郷南洲は其一なり大久保甲東は其一なり勝海舟は其一なり(中略)本書は其の一人に就て最も大關係ある西郷の公私に繫る性行閲歷を詳細に叙論せるもの(中略)其材料の撰擇、評論の精確ともに利慾を主として編纂する坊間の出版物に徑庭あるは必ず讀者の認むる所ならん云々●東京日々新聞 南洲の性行を叙するもの從來其書に乏しからず而かも其事實の正確其評論の公平此書の如きは稀なり云々●東京朝日新聞(前略)此書完成の日は一日叛賊に汚したる南洲翁其精神は之に由て落々後世を照すものあらん云々●國民新聞 西郷南洲が維新英雄中に首座を占むべき人物たるとは之を言ふもの多しと雖も多くは抽象的贊辭に止まりて其委曲を知るに由なし(中略)今勝田孫彌氏の著述に係る隆盛第一卷を見るに(中略)南洲の履歷を詳悉すると同時に心中の委曲をも紹介するに足るべし●毎日新聞 此れは是れ南洲翁の詳傳にして其精確なる者坊間傳ふる所のものと天壤月鼈著者の苦心以て見るべき也云々●中央新聞 勝田孫彌氏の編著なり事實最も精確、叙事に序あり一句苟くもせず(以下略)●女學雜誌(前略)此傳確かに隆盛傳中の最良のものたり茲に始めて首尾連絡し因果明瞭したる好傳紀を得て近代の偉人が眞本領、やうやく發揮せらる(以下略)●福音新報(前略)吾人が有らゆる西郷傳に遺憾を訴へしは搜索捃摭未だ悉さゞるにありき然るに此書や[illegible]や吾人の遺憾を償ふに足れり云々

泰東勝田孫彌君編

德川封建時代日本地圖

全壹幅 彩色鮮明

定價 別製 金八拾錢

郵稅金四錢

○切手代用一割增

此地圖は編者近世の歷史を研究するに當り完備せる封建地圖なき大に其不便を感じ現時行はるゝ最も精確の地圖を基礎とし德川時代の諸書地圖等に參照し編製したるものにて各種の彩色を以て**城代、奉行所、三藩、家門、外藩、譜代**の區別を明にし又各藩の氏名石高を記す故に**諸藩對立**の形勢を知るのみならず**大雄德川家康**が**其子孫**をして**三百の諸侯**を統御せしめたる**遠略遺圖**を一目の下に明瞭ならしむ

為替振込 東京銀坐

發行所 東京市京橋區彌左衛門町 **東光館**

取次大賣捌所 東京京橋區尾張町東海堂●仝銀坐博聞社 仝神田表神保町東京堂●大坂東區盛文館

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

琵琶湖連合競漕會弘告

來ル七月十日本會ヲ滋賀縣大津町打出濱ニ於テ相催シ候條御入會ノ諸君ハ左ノ本會規則ニ從ヒ六月三十日迄ニ各學校委員ヘ御申込相成度候也

明治二十八年五月

帝國大學委員　池田廉一郎　荻原時次　星野一太郎
中原德太郎　高壯吉　須永憲　清水泰吉

高等商業學校委員　今西鎌三　川原林順次郎　岸吉松

第一高等學校委員　伴宜　加藤主計　塚本小四郎
守隨啓四郎　柳元宇平　〔いろは順〕

追テ本會成立ニ付キ何卒御盡力下サレ度各學校職員運動部委員其筋ノ諸君ニ懇願仕候

琵琶湖連合競漕會規則

第一條。本會ハ全國有志ぼーと家ヨリ成リ其目的トスル所ハ漕艇術ヲ獎勵シ海事思想ヲ助長セシメ併セテ互ニ懷抱ヲ陳ベ氣脈ヲ通シ斯道ノ發達ヲ期スルニアリ

第二條。本會ハ今年七月十日〔雨天順延〕午前八時ヲ期シ滋賀縣大津町琵琶湖畔ニ於テ競漕執行ス

第三條。本會ヘ入會セントスル者ハ氏名ヲ各自所屬學校ノ委員ヘ競漕會費三十錢ヲ添ヘ六月三十日マテニ差出スベシ

第四條。本會ハ左ノ役員ヲ置ク
會長　一名　評議員　若干名〔以上委員之レヲ推撰ス〕
幹事　若干名〔會長之レヲ撰任ス〕　委員　若干名〔發起人之レヲ囑托ス〕
但シ競漕ノ節ハ臨時役員ヲ増置スルヿアルベシ

第五條。役員ハ左ノ任務ニ服ス　一、會長ハ本會ヲ統監シ事務ヲ總理ス　二、評議員ハ本會事務ノ大綱ヲ議定ス　三、幹事ハ會長ヲ補佐シ事務ヲ處理ス　四、委員ハ競漕及ビ平常一切ノ事務ヲ處理ス

第六條。本會ハ競漕後會員ノ懇親會ヲ開クヿアルベシ

第七條。本會執行ニ付キ會員ニ報告スベキ件ハ各學校若クハ近江新報、大阪朝日、日出新聞、日本、ニ廣告スベシ

明治清教徒

毎月一回發行

第七號（四月廿五日發兌）目次

『明治清教徒』○理性の權威
『教理講話』○基督の完全
『特別寄書』○心靈不滅……小西增太郎
『雜錄』○ルーテルの優情○直裁なるべし○ヂョナサン、エドワルヅ神に接す○主の祈禱○祭司としての英雄―宗教改革家を論ず○和歌と宗教に付きて（清の舍主人）○詩歌
『時論』適切卓拔なる評論數件
（附錄）『講壇』基督の淚（下）

定價一冊金五錢　半ヶ年六冊二十八錢　一年分十二冊五十五錢（前金）郵稅不要　爲換振出局東京麻布郵便電信支局、五厘切手代用は一割增

發行所　東京麻布區麻布霞町廿四番地　基督教革新會

眞光

毎月一回發行
第一號五月十五日發行

社說　發行の辭　信仰の經驗　信仰個條に就て……美綠
論說　非讀書論……愛州　音樂と文明……美綠
社會の進步と個人の品性……靜淵
靈火……白衣　舊約雅歌……鷗村
雜錄　反省餘錄……信堂　月夜に故鄉を憶ふ……蕭條
夢幻錄……落葉　ちこさくら……幽花　さくら……愛　氷人……白衣
講壇　基督は誰そや……
評論……

一冊六錢無郵稅

東京市麴町區下六番町七番地　眞光社

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅四錢
（六版）百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同 四錢
（信神孝父）腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同 四錢
（諧さき）猫と鼠	女學雜誌社編	同 五錢	同 二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同 前	同 十錢	同
公娼可滅	同 前	同 五錢	同
教育講義	同 前	同 十錢	同
日本女學	同 前	同 五錢	同
（再版）文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同 四錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同 十錢	同 二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 市川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同 五錢	同 二錢
西洋の禮	本社著	同 十錢	同
小供の話	同	同 十錢	同
兒育草	同	同 八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同 十錢	同

新刊書籍

戲曲 桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	二錢	郵稅二錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

大奧の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛）
日本の婦人（一冊正價五十錢、郵稅六錢）
女子の本分（一冊定價廿五錢、郵稅六錢）
透谷集（一冊定價三十八錢、郵稅六錢）
西鄉隆盛傳（一冊正價三十錢、五冊一圓卅五錢）
岡山孤兒院（一冊定價二十錢、郵稅四錢）
救急看護法（一冊正價金卅五錢、郵稅貳錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候　巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊價 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行（廿七字詰）一回 前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年五月廿日印刷
明治廿八年五月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子　若松賤子譯　一冊廿八錢　郵税四錢
（六版）百人一首講義　鈴木弘恭氏講　同廿八錢　同四錢
（信神孝父）腓立比物語　櫻井成明氏譯　同廿五錢　同四錢
（諷さき）猫と鼠　女學雜誌社編　同五錢　同二錢
吾黨の女子教育　巖本善治著　一冊十錢　郵税二錢
木村鐙子小傳　同前　同十錢　同
公娼可滅　同前　同五錢　同
教育講義　同前　同十錢　同
日本女學　同前　同五錢　同
（再版）文法口授　鈴木弘恭君述　同十二錢　同
婚姻論　横山雅男君著　同十六錢　同四錢
產婦小兒攝生法　船越鼎太郎君著　同十錢　同二錢
邦文學　松山高吉君著　同二十錢　無郵税
俳諧史傳　小此木信一郎　布川孫市　兩君同著　同三十錢　同四錢
善惡の岐　中島とし子著　同二十錢　同
廢娼演說　島田三郎　植木枝盛　兩君同著　同五錢　同二錢
西洋女禮　本社著　同十錢　同
小供の話　同　同十錢　同
兒育草　同　同八錢　同
藝者と手掛　炭谷小梅女著　同十錢　同

新刊書籍

戲曲 桂五郎　阿波鳴門左衛門著　十錢　郵税二錢
高橋傳五郎　巖本善治編輯　五錢　郵税二錢
偉人物　山月子稿　二錢　郵税二錢

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

大奧の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵税六錢宛）
日本の婦人（一冊正價五十錢、郵税六錢）
女子の本分（一冊定價廿五錢、郵税六錢）
透谷集（一冊定價三十八錢、郵税六錢）
西鄉隆盛傳（一冊正價三十錢、五冊一圓卅五錢）
岡山孤兒院（一冊定價二十錢、郵税四錢）
救急看護法（一冊正價金卅五錢、郵税貳錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候　巖本善治

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金	注文
壹冊價 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵税）	一行（廿七字詰）一回 前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十二月十四日內務省許可
明治廿八年五月廿四日印刷
明治廿八年五月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）